



パレスチナ人クリスチャンと平和

世界のある人々、とくに一部のキリスト教右派の人たちは、神さまのことを一種の不動産屋だと信じているようです。この紛争の原因は土地なのです。そしてその土地を私たちは故郷と信じているのです。アブラハムの子として、そこが自分の土地だと他の人が言うのなら、私たちにもその権利はあるのです。

聖公会エルサレム教区主教 リア・アブ・エル=アサール

パレスチナのクリスチャン達を迎えて

主教 植田仁太郎 (日本聖公会東京教区主教)

エルサレム教区からリア・アサー
ル主教一行を迎えて、パレスチナの
人々に連帯しようとしている様々な
グループが、ご一緒に集会を持てま
したことは、誠にうれしいことです。

パレスチナのクリスチャン達はそ
の存在だけで、私たちそして世界に
多くのことを語りかけ、また全く新
しい視点を与えてくれるように思い
ます。イスラエルの国家の横暴に抵
抗しているのは、ただイスラム教徒・
アラブ人だという宗教対立の構図と
して描きがちな現在のパレスチナの
状況に、違った光を当ててくれます。

またアラブ人クリスチャンの存在
は、ユダヤ人の信仰遺産(たとえば
旧約聖書)を、アラブ人も受け継い

でいることを教えてください。そし
てその信仰遺産の受け継ぎ方も、「ユ
ダヤ人の」という枠を越えて、もっ
と普遍的なものとしての受け取り方
でしょう。「ユダヤ教を母体として生
まれたキリスト教」という単純化し
た見方に、修正を迫られるでしょう。

パレスチナの地に確立されるべき
正義と平和がどのような形であるべ
きなのか、そしてそのために国際社
会とその一員である日本の私たちが
どのような役割を担うべきなのか、
今後の交流を通じて、さらに学んで
ゆきたいと思います。

この集会を準備し、また参加して
下さったみなさんに、心から感謝致
します。

目次

- p.2 挨拶 主教 植田仁太郎
- p.3 交流集会「パレスチナ人クリスチャンと平和」の概要と報告
- 状況報告「パレスチナ人の生活」
 - p.4 パレスチナ自治区
 - p.6 ヨルダンとレバノンのパレスチナ難民
 - p.7 イスラエルのアラブ・パレスチナ人
 - p.9 聖公会エルサレム教区の働き
- 基調講演
 - p.12 「問題の根、平和への希望」 主教 リア・アブ・エル＝アサール
 - p.16 質疑応答
 - p.19 「基調講演を受けて」 牧師 村山盛忠
- 理解を広げるために
 - p.22 「シャロンの弾圧政策下で向き合うパレスチナ人とイスラエル軍兵士」
 - p.26 「子どもたちの願いと現実」
 - p.28 「包囲されたパレスチナ」(分離壁について)
 - p.30 「シオニズムについて」
- p.37 協賛団体紹介
- メモ
 - p.6 パレスチナ難民
 - p.16 パレスチナのクリスチャン人口
 - p.17 3月30日「土地の日」
 - p.17 支配地域の年代順変化
 - p.35 非暴力抵抗運動によって
占領に終止符を：EAPPI 紹介
 - p.36 参考文献紹介
 - p.43 自治区と入植地の地図

表紙写真：ダマスカス難民キャンプの子ども達

裏表紙写真：家の前に壁を作られ、畑と分断された家族

大島俊一

(プロフィール) 神奈川県生まれ。報道写真家。パレスチナな
ど紛争地域取材しているほか、タイのスラムや日本の野宿
者など、人々の生きる姿を追っている。

交流集会「パレスチナ人クリスチャンと平和」の概要とご報告

「パレスチナ人がみんなイスラム教徒で"自爆テロリスト"であるかのように伝え、あるいはパレスチナ紛争を三千年以上続くユダヤ人とアラブ人の宗教的、民族的対立として捉えるような、彼らの解放への道のりを故意に歪めたイメージが問題の理解と解決を妨げています。パレスチナ人クリスチャンの存在はそうしたプロパガンダの誤りの証しです。聖公会エルサレム教区から8人の訪問団を迎え、パレスチナの一般民衆が日々の生活で被っている暴力と、それに対する抵抗、ビジョンについて話を聞き、交流する機会を持ちます。どうぞご参加下さい。」

このような趣旨で、サラーム・パレスチナ、アハリー・アラブ病院を支える会、パレスチナ子どものキャンペーン、日本キリスト教協議会(NCC)・国際関係委員会の共催により、2004年9月23日、東京・芝公園の日本聖公会東京教区聖アンデレ教会にて、交流集会「パレスチナ人クリスチャンと平和」を開催いたしました。

- 9.23 プログラム -

10:00～状況報告

「パレスチナ人の生活」

11:30～昼食・交流会

NGOの活動紹介展示

13:00～基調講演

「問題の根、平和への希望」

リア・アブ・エル＝アサール主教

コメント：村山盛忠さん

14:15～ティーパーティー

講演を受けての質疑

15:00 終了

これは日本聖公会東京教区の招きにより、聖公会エルサレム教区からリア・アブ・エル＝アサール主教を含む8名が来日する機会を捉え、日本でパレスチナ問題に取り組む諸団体に広く呼びかけて交流と学びの時としたものです。

当日は、午前の部150名、午後の部200名あまりの参加者がありました。この機会にパレスチナの医療と教育のために行った募金は52万円集まり、アサールさんにお渡ししました。

本冊子は、交流集会の講演録に、今後の取り組みのヒントとしていただくためのエッセイを加えたものです。巻末には、主催・協賛団

体のプロフィールも掲載しています。どうぞご活用ください。

「中東世界におけるキリスト教の存在は、単純に宗教的次元でとらえることのできない社会的・歴史的背景を踏まえての少数者の存在意味があるのです。今日の集会在キリスト教の集会になっていますが、これは日本の土壌で受けとめられるような宗教的・信仰的次元でとりあげていてのではないことを理解する必要があります。先に述べましたように社会的マイノリティからの発言として聞くことが、いちばん適切だと言えます。」(村山盛忠)



協賛団体 (順不同・巻末に紹介があります)

社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本、ハジャルナ、特定非営利活動法人 アーユス仏教国際協力ネットワーク、わかちあいプロジェクト、日本パレスチナ医療協会、パレスチナの平和を考える会、財団法人日本キリスト教アカデミー、財団法人日本YMCA同盟、特定非営利活動法人 聖地の子どもを支える会、パレスチナ・オリーブ、特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター、日本YWCA、聖公会出版、パレスチナの子供の里親運動、占領に反対する芸術家たち、日本キリスト教婦人矯風会



Ms. Shafiqah Dawani

シャフィカ・ダワニ

西岸のラマラで生まれ、現在 50 代前半。特別なサポートを必要とする子どもの教師として働いてきた。ラマラに住み、結婚して 3 人の娘がいる。

●「ディアスポラ」の 56 年

私が子どもの時から、いえ生まれる前から、歴史の教科書が記すように、また私達の祖父母が語り伝えた通り、イスラエルとパレスチナは紛争が絶えず、不安定でないときはありませんでした。1948 年、私達の父母は、ハイファ・ジャファ・エルサレムにあった土地・家屋・全ての財産一切が奪われ、立退きを迫られました。そして二度と戻ることは許されませんでした。彼らは難民となって他のアラブの国々に散らばりました。1967 年に 6 日戦争が起こり、イスラエルは移り住んだヨルダン川西岸地域を占領し、父達は二回目の難民となりました。

今日、私達第 3 世代、また私達の子どもの第 4 世代も同じように抑圧されています。目の前で、人が殺され、土地、家屋が没収され、オリーブの木が伐採され、囚人となり、水を奪われ、自由、安全が奪われ、チェックポイントでは、イスラエル兵から辱められ、分離の壁によって市町村は、引き裂かれています。三回目の難民となって全てを失いつつあります。

パレスチナ人の生活： パレスチナ自治区

●第 2 次インティファダが始まって 4 年

2000 年 9 月、イスラエルのシャロン首相は、イスラム教のモスク、アル・アクサの訪問を強行し、引き連れた警察の発砲によって流血の事態を引き起こし、それに対する抗議で第 2 次インティファダが起こりました。この間、パレスチナ人は大被害を被りました。精神的な傷だけではなく、教育面、医療面においても、被害を受け、特にガザ地区ではほとんど全ての家族が痛手を受けました。妻が刑務所に入れられ、残された子どもの面倒を見る父親の姿を想像してください。夫が刑務所に連れていかれ、あるいは殺害され、残された数多い子どもと生活の糧もなく暮らさなければならない母親の姿を目に浮かべてください。チェックポイントで自分の孫のように若いイスラエル兵に怒鳴られ、辱められている老人の姿を想像してみてください。

ラファ、ガザ地区の難民キャンプにいる子ども達は恐怖におのっています。彼らは普通の子ども以上に脅え、親から離れません。おねしょもよくします。というのも、家が爆破されたり、また真昼間に人通りの多い通りで闘争が起こって攻撃された車の近くにいた女性が吹き飛ばされ、ばらばらになった体が血まみれになっているような光景を見ているからです。

ガザの病院の冷凍室に死体が冷凍されているような光景はごく普通の光景としてテレビに映し出されますが、それを多くの子ども達が見ているのです。

ベツレヘムにある生誕教会の敷地に入りますと、3 年前に若くして殺された、教会の鐘を鳴らす点鐘者のことが思い出されます。

付近の店の前を通りますと、イスラエルの攻撃から身を守るために隠れていた母親が殺害され、子どもが母の帰るのを待っていたことを思い出します。

あるベツレヘムのホテルの大きくて静寂とした扉のところでは、イスラエル兵が狙った車とたまたま似ていた車に乗っていたために、全く関係のない少女が攻撃されて殺されました。

何校かの学校では、空いている机の上に友達の写真を置いています。生徒とその写真も共に進級します。子どもは教科書を抱えて学校にくる途中、無残にも殺されました。生徒達は写真を立てて、その友達を思い出します。

高い失業率は、人々に経済的にも、精神的にも大きな打撃となりました。パレスチナの人口の 60% が失業という状況です。貧乏をしのぐために子どもの労働が明らかに増えました。

●分離壁が作られて

道が閉鎖されているために病気の人々はイスラエルの病院では治療を受けられません。病院まで車でわずか 20 分の距離なのに、チェックポイントで 3、4 時間待たされ、車の中で命がけでお産をした妊婦もいます。傷ついた人を救おうとした救急車は攻撃され、救急車のドライバー数人が殺されたこともあります。

何処に行くにも制限が、壁があります。

農民はイスラエル人の居住地に農地が面しているからとオリーブ畑や穀物畑を削られ、収穫を失いました。違法居住だとして水を奪われ、生産高が減りました。

ベツレヘムにいる人々は壁のために土地の一部を失いました。

学生は大学に行くにもこの壁ができたために遠回りを強いられ、冬は沼地の中を横切り、夏は暑い照り返しの中を我慢して通学します。通学の途中も安全かどうかも予期できません。このチェックポイントのために、パレスチナ人のクリスチャンは教会に行くことも妨げられます。エルサレムにある聖公会は大きな被害を受けました。半分以上の信徒がエルサレムの境界の外に住んでいるため、壁によって分離されてしまったのです。いつかはエルサレム住居者としての権利を失うでしょう。もはや自由に聖地に入れません。ガザ地区、西岸地区の居住者は、いかなる理由があっても、空港から土地を離れるという手段は許されず、ヨルダン川の橋を横断しなければならず、これが夏はとも込み合い大変でお金もかかります。結果として、共同体の全ての人々が被害を受け、子ども達は子どもとしての生活を失い、娯楽もなくなりました。

●私たちは希望を失わない

手短ではございますが、これがガザ地区、西岸地区で、苦しみ、抑圧をうけているパレスチナ人の生活実態です。しかし、いかなる悲劇、貧困も、囚人問題が忘れられても、自由の拒否にあっても、パレスチナ人は権利の訴えをやめることはありません。私たちは、体の奥底で、平和を望む愛に満ちた心を持ち続けます。

パレスチナで平和の実現に尽くしている人々は、男女を問わず、イスラム教徒、キリスト教徒を問いません。イスラエルの平和行動家たちと共に、正義に立った平和を実現しようと、パレスチナの独立国家を誕生させ、イスラエルとパレスチナの2つの国家が平和にくらせるようにと、手と手を取りあい共に働いています。

パレスチナ人は決して希望を失いません。辛抱強く、教育もあり、高い志を持っています。いつかはこの暗い雲が通りすぎ、自分達の独立国家誕生の喜びがあることを信じています。多くの人々がその国

家を建設するために犠牲となり、犠牲となり続けています。

助けを求めている人の訴え、叫びに答えるのは、クリスチャンとしての使命です。

聖書の箴言 13 章 8 節、9 節をよみますと、私達は、訴えのできない人々に代わって訴え、全てを失った人々の権利を守り、貧しい人、困っている人に代わって立ち上がり、公平な裁きと彼らの権利を守る行動をとらねば、ということをお教えられます。

私達は、キリストの一つの体として、手と手を取りながら、この聖地で、平和と安定を実現するために、働かなければなりません。

皆さんは、この働きを共にしてください。パートナーです。パレスチナにある私達の教会を訪問し、勇気付け、支援していただきますようお願いいたします。いつでも歓迎いたします。

皆様に神様のお恵みがありますよう。



逮捕された息子達のインフォメーション（ガザ） 写真：大島俊一



Ms. Rania Abu ElAssal

ラニア・アブ・エル＝アサール

リア主教の娘。ナザレで生まれ、現在 20 代後半。米国の大学で哲学を学んだ。ナザレで主教の秘書として働いている。

人間愛において、またキリストにおいて、ナザレより、兄弟姉妹と共に、ご挨拶いたします。

ついに美しい島国である日本の地を踏むことができ、大変嬉しく思います。遠い中東から極東にある東京までの飛行は、何かマジックのように思われます。こうして話をしているうちに時間もたち、人生という時計もほこりを被ってしまうことに気が付きます。この訪問には、成し遂げたい目的、使命があります。私達は光を照らすために、闇に隠れていたものを照らして明るみに出すために、ここにいます。人から人へ、人生から次の人生へ、目的のない話は、行く先のない旅となってしまいますので、そうならない様にお話をいたします。

2 年程前の韓国訪問の際は通訳がなかったものですから、旧友が、“もし話が通じない場合は、ときによっては、分かった振りする方が易しいかも…”とアドバイスをもらいましたが、今回は通訳していただきますので、そのようなことはないでしょう。

イスラエルのアラブ・パレスチナ人

イスラエルに住むアラブ・パレスチナ人について、10 分ほどお話をするように頼まれました。話を短くするには、どんな話題もそうですが、何をどうはなそうかと考える時間が、かえって長くなります。分刻み、時間刻みで話を測られるのは実は嫌なのですが、といますのは、時間ではかられたものはあとが残らず、その時間限りで終わってしまうのではと思うからです。これから手短にお話します旅に、ついてきていただけますか？

それは 55 年前のことです。場所はパレスチナ、時は 1948 年、事件は、イスラエルの建国、力による占領地パレスチナに建国。これによって、私達パレスチナ人のこの世での生活あらゆる面が、ひっくり返りました。

占領後のパレスチナで、アラブ・パレスチナ人が、どのような状況

におかれているか、5 つの事実をとりあげてお話いたします。

(1) 多数派が、少数派へと変わりました。

1948 年以前はイギリス委任統治領パレスチナに 100 万人のパレスチナ人が住んでいました。その内キリスト教徒は 23% を占めておりました。イスラエル建国の結果、パレスチナ人は 15 万 6 千人にまで減りました。

(2) 土地の領主は土地を失い難民となり、またある者は占領者につかえる使用人と化しました。402 もあったアラブの村が完全にとり壊されました。

イスラエルは、アラブ人を完全には追放できませんでした。特に分割案によってパレスチナ領とされる場所では、あるイスラエルの指導者は、何故アラブ人少数者を残したのかと聞かれて、“食事



南レバノンの難民キャンプで家を壊された子どもたち 写真：大島俊一

の用意をしたり、木を切る人手が必要だからだ”と答えました。

(3) パレスチナ人は、人口におけるユダヤ人優位を保つための様々な差別政策に苦しんできました。

例えば、ヘブライ大学に入学を許可される人数は大変限られたもので、それ故に、大学を目指す学生は他の場所を見つけなければなりません。イスラエルは、こうすることによって海外への移住をうながし、民族退去させることを意図しているのです。

教会、宗教施設は、全く保護されていない状態です。93%のパレスチナの土地が没収され、その中には、教会所有のものも含まれています。現在までに、東エルサレムの幾つもの由緒あるキリスト教会の周囲も占領されました。

職は、最後に雇われ、最初に解雇されるという状況です。

取り残された私達は、武器を持たずにこの差別と闘争してきましたが、ユダヤ人とホロコーストを懸念するため、国際機関からは支持を得ることができませんでした。実際、パレスチナの現状を“ポロコースト”とあえて呼ぶ人もいます。

(4) 現在のアラブ・イスラエル人の状況を申し上げます。

私達が土地にとどまるのを諦めさせるような様々な政策の全てには打ち勝つことはできませんでした。パレスチナの地を離れた者もおります。しかし残った者は、あくまでも土地にとどまり、土地を守る権利を主張し続けることで、多くの同胞が負けてしまった闘いを勝ち取ってきました。海外で教育を受け、この地に戻って尽くそうとしている人も沢山います。

市議会は、ユダヤ人への割り当ての三分の一の予算しか与えられていませんが、アラブ人の市町村の状況をなんとか向上させてまいりました。

(5) 1948年に15万6千人だった少数派は、今130万人となりました。

イスラエルに住むアラブ・パレスチナ人は、イスラエルの人口の20%近くを占めています。このアラブ少数派の中で、クリスチャンは10%を占め、その宗派は様々です。アラブ・パレスチナ人で、クリスチャンは少数ではありますが、その活動の幅は、その数を越えたものであります。私達は、共同体に主に医療・教育機関を通じて、貢献しています。私達の活動は、多くの人々から、そしてまた、イスラム教徒の兄弟姉妹からも感謝されています。私達の後に続く人も増えています。

私達アラブ・イスラエル人は希望がない者にとっての希望となりました。私達アラブ・イスラエル人は、掛け橋となることもできます。アラブ人であるゆえ、アラブ人と話ができます。これはユダヤ人ではできません。パレスチナ人であるゆえ、パレスチナの人々に語りかけることができます。これはユダヤ人ではできません。

それでは、クリスチャンとしてクリスチャンへ話をするとは？まるで壁に向かって話しているような、途方に暮れる思いにさせられるのです。キリスト教右翼、キリスト教シオニスト、原理主義的福音主義者たち、彼らは私達が在る事実を知りません。アラブ・パレスチナ人のアイデンティティへの無知に、私達はひどく傷つけられています。この無知は、私たちキリスト者の一致に深い亀裂をもたらしてきました。はつきり申し

上げておきますが、アラブ人が皆すべてイスラム教徒であるわけではありませし、イスラム教徒が皆すべてアラブ人だというわけではありません。私達アラブ人キリスト教徒は、2000年も前から、イスラム教がおこる700年前から、この中東の地で、信仰を守ってきたのです。

女性達、パレスチナの母親達が、闘いを担ってきたことも知ってください。なかでも重要なのは、私達をイスラエル化するというイスラエルの戦略を阻止してきたことです。今日、パレスチナの女性は、祖母たちがもうやめてしまった習慣・伝統を実践し、またそれを娘達に伝えようとしています。それは、私達の真正な根をたもち、いのちの水で育て、それによって愛するパレスチナの乾きを癒す、聖なる使命です。私達は威厳を決して捨てません。橋となり、網となり、滝となる用意があります。神が許し賜うならば、パレスチナ国家を生む安全な胎になる用意があります。

最後になりますが、中国のことわざに、“話をするだけでは、ご飯はできない”というのがありますが、言葉が行いとなり、幻が現実となりますよう、祈ります。皆さん日本の兄弟姉妹が、私達もまたキリストの家族の一員であることを認め、また日本の皆さんの信仰と私達の信仰が誕生したその場で、わたしたちがより大きな奉仕ができるよう、支えてくださることを望みます。

お時間有難うございました。共に持ったこの時を無駄にしないようにしましょう。



Fr. Samuel Barhoum

司祭 サムエル・バーホーム

1965年、ガリラヤで生まれた。エジプトで神学を学び、後に米国カリフォルニア・パークレーの聖公会神学院から神学修士号を取得。1993年に司祭として按手を受け、今はナザレとレイネの教会で働いている。教区のキリスト教教育、教区・管区の青年活動のコーディネーターなどを担当。人権問題、環境問題、平和的共存に関心を持つ。結婚して、娘1人、息子1人がいる。

聖地に住むパレスチナ人クリスチャンとして皆様方と私たちの信仰、生活、経験を分かち合えることを嬉しく思います。また、このたび東京教区、および植田主教からお招きをいただき、このような機会を与えてくださったことを感謝いたします。

私はガリラヤの出身ですが、その地はイエス・キリストが生き、教え、奇跡と癒しをなされ、また私たちの罪のために苦しみを受け、死なれ、勝利のよみがえりをなされ、私たちに新たな命を与えてくださった聖地です。

●私たちのミッション理解

イエス様が山上の説教で私たちに与えた使命は、平和を作り出す人、平和を実現する人は幸いである、平和を実現する人は神の子であるというものです。イエス様は、「平和を唱える人は幸いである」とは言いませんでした。平和を実現する人、平和を作り出す人とは、自ら進んで平和作りのプロセスに

聖公会エルサレム 教区の働き

関わる人を指します。ただ単に平和を唱えて促すのではなく、実際に自分の手を汚してでもそのプロセスに関わっていく人です。

平和とは、まず自己の内に安らかな平和の心があり、そして自分だけではなく、神様と共に、また他の人々と共に平和であるという状態をいいます。人は、まず自分の心の中に平和を確信し、平和を学ばなければなりません。そして初めて、平和について教え、平和のために働くことができるのです。平和は一夜にしてなりません。平和とはプロセスです。そのプロセスは一定の条件を必要とし、平和を作り出す人となるにも一定の条件があるのです。

イスラエルに住むパレスチナ人として、私たちは不平等の状況にあります。あらゆる生活の面で差別を受け、肉体的、また精神的にもひどく迫害されている状況にあります。私たちは、イスラエルの市民権は与えられていますが、それは義務を果たすためであり、権利ではないのです。そういった意味で、正義は私たちの下にはありません。

教会は、このような状態にあつて黙ってはいず、共同体の人々のために活発に絶えず活動してきました。それでは聖地にある教会として、私たちは何をしていますでしょうか？

- ・平和と正義の実現につとめます。
- ・クリスチャンの共同体だけでなく、地域の他の共同体でも、生活が向上するようつとめます。

・神様の寛大さを社会において実現するべくつとめます。

・イエス・キリストの御名によって人に仕えます。

・身体と知性と精神において共同体が必要とすることを満たすべく、つとめます。

・私たちの教会は、イエス・キリストの福音を忠実に広め、世界の人々と共に宣教の機会を分かち合うことを喜びとしています。

・社会に出ていって働くことは、私たちの宣教の重要な部分です。イエス様の目となり、耳となり、手足となって、この世の中で働くようにと、イエス様は求められておられると信じています。

・神様に仕えることは、人に仕えることです。

・私たちは愛をもって人に仕え、手を差し伸べようと努力します。なぜならば、神様が私たちにそうしてくださり、また私たちが神様と同様にそうするように、神様が示してくださっているからです。

・信仰とは共同体の中でそれを実際に行っていく実践を指します。

●エルサレムの聖公会の働き

エルサレムの聖公会は、その信仰に基づき共同体の多くの生活面で活動を行っています。その教区の活動は幅広く、共同体のあらゆるレベル、年齢に及んでいます。

・子どもたちのための日曜学校がありまして、幼いうちから神様の愛と知恵が教育されるような奉仕活動を行っています。

・青年の集いもあります。安全な環境の下で自由に分かち合い、神様の愛の教えを学びます。



アハリー・アラブ病院では、必要な家庭に食料援助も行っている。(ガザ)

- ・婦人の集いもあります。そこではお互い励ましあい、聖書の勉強をします。
- ・祈りのグループもあり、共に祈り、共同体の関心事を分かち合います。
- ・その他、様々な活動があります。例えばエアロビクス、アスレチックス、料理、フードデザイン等の諸活動や、自分たちの大切な課題を取り上げる講座を開いています。

教区は、医療・教育面での幅広い奉仕活動も行っています。西岸地区、ガザ地区では、医療保険、医療の厚生というものもありませんし、医療費はととも高くつきます。教会は二つの病院を経営しておりますが、そこでは医療費用というものが適切な価格で提供されていますし、場合によっては無料となります。教会が経営する病院では、自宅までの交通費に余裕がない患者を、病院が自宅まで送ることもします。

また教区には沢山の学校と幼稚園があります。抑圧された人々には教育は大変重要だと思います。学校教育によって、人は苦しい困難を切り抜け、より良い生活をする力を得ます。これらの学校教育

の費用は安く、無料で受けている人もいます。教師の質は高く、高度な教育を学生に提供してくれます。また学校は教師の資格を持つ人にとっては仕事を得られる場です。ほかでの職探しは難しいですから。

普通教育が受けられる学校の他に職業訓練学校もあり、そこでは生活をするうえで必要なトレーニングが提供されます。

そしてまた特殊学校、知恵遅れ、目や耳の不自由な子どもたちのための学校もあります。これらの学校施設では、医療のケアだけでなく、普通の生活を送ることができるようなトレーニングもしています。

また教区は、家、家庭を失った子どもたちに孤児院を運営しています。

大学生が宿泊できる施設もあります。ここでは学生はキリスト教の環境の下で生活をします。イスラエルの大学は、イスラエルの主要都市に在していますが、多くのユダヤ人が下宿を拒んでいます。この施設はアラブ・パレスチナの学生を受け入れるものです。

教会はまた、巡礼者のための宿泊施設も営んでいます。そこは巡礼者がキリスト教徒としてのもてなしを受け、また世界各地から訪れる人々と交わりができる場であり、また共同体のために仕事を提供してくれる場でもあります。

おおまかにいって共同体への奉仕はこうした働きですが、個々のレベル、家族のレベルまでにも教会というものが行き届いた活動を行っています。というのは、だれもが「自分が生きている価値があり、自分が見捨てられてはいない、一人ではない」と感じてもらいたいからです。特にクリスマス、イー

スター、そして学期の始めなどに、必要としている人には財政的な援助も行います。年間を通した援助をすることもあります。自立できるようにと、仕事探しの手伝いもします。

教育は大変重要ですが、しかしながら高等教育にはかなり費用もかかりますので、教会は大学生に奨学金制度や財政援助も行っています。

このように、教会は共同体に対して精神的に必要なものを与える以上のものを提供しています。教会は人々の手足となって動いています。教会は人々が恐れることなく集い、分かち合える安全で建設的な場なのです。

●連帯の必要とお願い

私たちの土地がこのような難問を抱えている時期に、教会がこの重要な使命を果たし続けるためには、世界の人々によって支えられているということを感じ、認識することが必要です。世界の人々が連帯してくださり、私たちのために祈り、支えてくれることを思えば、どんなに辛くても苦しみを乗り越えることができます。この連帯がなければ私達は孤独を感じ、孤立してしまうでしょう。

教会は多くのNGO、市民団体と共に働いています。人権、環境、医療、教育、法律などの領域で働く様々なイスラエル・パレスチナの団体、海外の団体と繋がっており、これらの団体の支援があつて、私たち共同体の生活も支えられ、向上しています。ヨーロッパ、アメリカにある多くの組織が長年にわたって私たちと共に働いてきました。様々な課題によりよく取り組みたいという夢を実現して来たのは、彼らのおかげです。

今後も働き続けられますよう、皆様の連帯とご支援をよろしくお願いたします。使徒パウロが言っているように、私たちはみんなキリストの体です。体の一部が苦しめば、体全体が苦しみます。皆様のご支援があれば、この苦しみに耐えることができます。私たちは皆様と、苦しみ、困難を分かち合えるからです。

皆さんの訪問をお待ちしています。私たちの生活、苦しみ、喜びを分かち合い、私の同胞に「自分たちは一人ではないのだ。平和と正義を望み、自分たちのために祈り、支えてくれる人々がいるのだ」ということを教えてあげてください。

また、どうぞ日本政府にも働きかけて、パレスチナの現状に目を見開かせ、パレスチナ人の正義と平等のために、平和のために、イスラエル政府が動かざるをえないような外交政策をとるように、私たちが声を上げたときにそれが聞かれるようにしてください。

また、教会が行っている奉仕活動へのご支援をお願いします。恵まれない状況にある共同体にさらなる奉仕ができるよう、どうぞお支えください。

皆様のお支えに感謝いたします。ただキリストによってのみ取り戻される平和、すべての理解をもたらず平和、永遠の平和のために、共に働き続けながら、これから皆様と関係を築いてゆくことができますよう願っております。

どうもありがとうございます。神様が皆様に祝福を賜りますように。

聖公会エルサレム教区

<http://www.j-diocese.com/>

パレスチナ地区のキリスト教会は、1世紀の教会成立期から綿々と存在し続けてきたが、東方教会がその主流を占めていた。西方教会であるローマ・カトリックもその初期から存在してきたが、プロテスタント諸教会がパレスチナに入ってきたのは、もちろん近代に入ってからである。聖公会エルサレム教区は、1821年の英国聖公会の宣教団体 "Church Missionary Society" の宣教に端を発する。

現在エルサレム教区は、パレスチナ、イスラエル、ヨルダン、シリア、レバノンの5カ国からなり、信徒数は約7,000人(ほぼ全員がパレスチナ・アラブ人)、教会数29、諸施設(病院、学校、障害者施設等)34、聖職数35人の規模である。

エルサレム教区は、非暴力・平和主義に徹し、世界の諸教会と連帯しながら、その働きを継続してきた。たとえば、ガザにある「アハリ・アラブ病院」では、イスラエル軍に爆撃され、傷を負った難民を日々受け入れ、診療費も取らずに治療してきた。今日では、イスラエル軍のチェックポイントに分断され、パレスチナ人の移動が阻止され、病院に行く事すら出来ない状態が続いている。そこでアハリ・アラブ病院では、逆に、医者と共に病院的設備を完備した救急車を各地に送るアウトリーチ・プログラムを展開、昨年一年で5,000回も出動、多くの人の命を救ってきた。

ラマツラでは、養護施設を作り、両親を殺された子どもを収容し、その教育のために学校を作り、卒業生のために職業訓練校を作り、多くの青少年の命を支えてきた。

各地にある学校では、5,000人の生徒・学生が学んでおり、コンピューターを使いこなし、抜群の進学率を誇っているが、その一方で、非暴力の平和教育が試みられている。その学生のほとんどがイスラム教徒であり、武器を持つての抵抗が容認される傾向にある昨今にあって、貴重な平和教育であるといえる。

またエルサレムにある St. George's College では、小学生のうちからパレスチナとイスラエルの子どもが共に集う夏のキャンプを行い、彼らが大学生になってもこのプログラムが継続されている。こうして子供の頃から、継続的に、友として対話を続け、共存していく関係を育てている。



エルサレム教区の現在の悩みは、信徒の数の減少である。教会の世界的な交わりがある故に、平和を求めて出国・移住するケースは少なくない。また多くの信徒子弟が海外に留学し、そのままその国に住み着いていくケースも多い。そしてその子弟が経済的な地盤を築くと、そのもとに

家族が引き取られるという形で海外流出が頻繁である。一方、海外に逃れた難民が帰国することは、一切許されていない。

聖公会は、カトリックとプロテスタントの両面を持つ故に、歴史的に両教会の橋渡的な存在を果たしてきた。そうした特質はエルサレム教区にも備わっており、ユダヤ教やイスラム教の平和路線を目指す人々との交わりがあり、諸宗教間レベルの、和解の架け橋的な役割を演じてきた。かつて南アフリカでディズモンド・ツツ大主教(聖公会、ノーベル平和賞受賞)を代表として、アパルトヘイト政策を終わらせるために聖公会が大きな働きを演じたように、パレスチナの聖公会も世界の教会と連帯し、平和と和解の働きを推進していくであろう事が期待される。



The At. Rev. Riah Abu El-Assal

主教 リア・アブ・エル＝アサール

アラブ系パレスチナ人、1937年ガリラヤのナザレに生まれる(現在67歳)。1948年、11歳の時、ユダヤ人の占領により、農地・家を奪われ、家族14人は、レバノンへ逃亡、難民となる。1949年、家族をレバノンに残し、姉と2人で、ナザレに帰還、ナザレに残った親戚と共に生活する。1960年、聖公会の教会で牧師となるべく、インドのビショップス・カレッジに留学、インド合同神学校を卒業(神学士)。1965年、聖公会司祭に叙任され、ナザレの教会に赴任、牧師として世界の教会と連帯しつつ、イスラム教関係者とも友好関係を持って、非暴力平和運動に取り組んできた。1997年、聖公会エルサレム教区主教に就任。

●ご挨拶

まず、こうして日本に来ることができて、皆さんとご一緒にいられることを、心から嬉しく思い、また光栄で、ありがたく思っていることをお伝えしたい。皆さんが、これまで何年にもわたって、私たちのために、教会や様々なグループを通して活動してくださっていることを、どんなに感謝しているか、それを表わす言葉を持ちません。私が日本人の皆さんとお会いして使うことができるただ一つの言葉は「ありがとう」です。

今日、お話しする問題は、パレスチナ人ばかりにではなく、世界の人全てに突きつけられている問題です。中近東の紛争に関すること、そして、もしこの紛争が終わ

問題の根、 平和への希望

り、(この「もし」は大きな「もし」なのですが)、平和が訪れるという希望があるのなら、その希望は何かということをお話しされました。

これから話をする前に、私は、パレスチナの同胞からのサラーム…平和の挨拶をお伝えする務めがあります。特に350万人にのぼるイスラエルによる不法な占領に苦しんでいるパレスチナの人々に代わって、このご挨拶をお届けします。過去4年間に殺された3500人のパレスチナの家族にも代わって、このご挨拶を申し上げます。またこのご挨拶は7000人にもものぼる政治犯として囚われている人々からの挨拶でもあります。同時にこの挨拶はイスラエル領に住み、イスラエル市民権を持つ130万人のパレスチナ人からの挨拶でもあります。それからさらに400万人にもなる離散しているパレスチナ難民からの挨拶でもあります。その400万人という難民の数は世界の難民の中で最大の人数であり、彼らの思いは故郷に帰ることに集中しているのです。それからこのご挨拶はパレスチナ人であれイスラエル人であれ、全ての平和活動をしている人々からの挨拶でもあります。

ぜひ、ここにいらっしゃるすべての方々に、今パレスチナで何が起きているかをご自分の目で見て頂くため、パレスチナを訪れて頂きたいと思います。皆さんを心から歓迎します。そして皆さんがおいでくださるときには、巡礼者としてよりも、事実をはっきりと見極める使命を持ってきてくだ

さることを望みます。地球はどんどん小さくなり、人々は世界をグローバル・ヴィレッジ(地球村)と呼びます。中近東で起きていること、イラン、イラクで起きていることは、日本にも直接影響を及ぼすのです。今まさにあの地域が混乱の極みにあるように見える、その第一の原因は、私たちがそのことに無知であるからです。無知は無関心を呼びます。何が起きているか知らないということは、人々の苦悩に対して無関心を生みだします。

私はこのような話を西洋の国で話すよりも、日本でお話しする方がよほど身近に思ってもらえるように感じます。あなた方は原子爆弾について、沖縄の米軍基地についてご存じです。紛争が何を意味するかをご存じだからです。

●紛争の原因

今の紛争の原因は、政治的、経済的、文化的な問題であり、さらには宗教的神話であります。

一つの歴史的な誤りは、1917年、パレスチナの地にはあたかも誰も住んでいないかのような伝説が語られたことです⁽¹⁾。もう一つの歴史的過ちは、第2次世界大戦中にユダヤ人たちに起こったことです。その第2次世界大戦で被害を被った人たちは、加害者に賠償を要請するよりも、その代償をパレスチナ人から取っているのが現実です。

*編註：第7回世界シオニスト会議(1905年)以降、「土地なき民に、民なき土地を」をスローガンにイスラエル建国が推進され、1917年、英国がパレスチナに「ユダヤ人の郷土(Home)」建設を認めた事を指す。

また、中東における紛争の経済的要因は「石油」です。中近東で石油が発見されて以来、石油は祝福であるよりも呪いとなってしまいました。もしイラクに石油がなかったら、アメリカもイギリスも今あそこにいるということはないでしょう。サダムと同じような体制の国は世界で幾つもありますけれど、アメリカもイギリスもその国に対して行動を起こそうとはしません。

もう一つ、この紛争の大きな原因になっているのは、キリスト教を信じている人にとって大切なことですが、宗教が生みだしている誤解、あるいは宗教が持っている誤った神話、さらにいえば聖書の解釈の仕方の問題です。今、申しましたように、この紛争の混乱の原因は様々にありますが、ある人たちはこの紛争の最大の原因は父なる神の意志を互いに誤解している点にあるかのように言います。

冒涇的だとは思わないでいただきたいのですが、この紛争の原因について私が好んで話す一つのお話があります。聖書に出てくるモーセの事をご存じだと思います。聖書によるとモーセは決して雄弁な人ではなく、いつも口ごもる人だということをご存じでしょう。エジプトからモーセが脱出したとき、彼らはいわゆる「約束の地」に行く途中、40年も道に迷い続けました。人々はモーセに「一体何をやっているんだ」と文句を言いました。神はモーセに少し良いことをしようと思われて、「おまえは私に何をしたいか？」と尋ねられました。モーセは40年も荒野をさまよっていたわけですから、「…何が欲しいって…」と口ごもりました。すると神さまは「わかった。言わなくてもいい。おまえの前には世界が広がっている。どこがほしいか指さ

してみよ」と、言われました。するとモーセは神さまが言い終えるのを待つこともできずに、目の前にある緑したたる美しい土地を見て、「…カ、カ、カ…」と言い始めました。神さまは「わかった、おまえはカナンの地が欲しいんだな…」と、言われました。が、実はモーセが欲しかったのはカナンではなくカナダだったのです！もしかしたらカリフォルニアかもしれないがね。これが原因でモーセはカナンの地に入ることができなかったのだ、という説を唱える人もいます。

世界のある人々、とくに一部のキリスト教右派の人たちは、神さまのことを一種の不動産屋だと信じているようです。この紛争の原因は土地なのです。そしてその土地を私たちは故郷と信じているのです。アブラハムの子として、そこが自分の土地だと他の人が言うのなら、私たちにもその権利はあるのです。ここではっきり申し上げたいのですが、アブラハムがユダヤ人であったなどは聖書の中には一言も書いてありません。問題の核心は土地です。土地をめぐる二つのグループがそこは自分の土地だと主張しているのです。しかし、元々その土地には二つのグループの人々が何千年も一緒に住んできました。紀元70年にユダヤ人があの土地から追い出されたときに、最も暖かく、最も親切に、離散するユダヤ人を迎えたのはアラブ人でした。紀元70年にローマ軍がエルサレムからユダヤ人たちを追い出したとき、その追い出された人たちはブルックリンやマンハッタンに行ったのではありません。彼らはモロッコ、レバノン、エジプト、シリアなどアラブ諸国に行き、アラブ人によって暖かく迎えられたのです。それは現代でも同じでした。

イギリスのパレスチナの地への利害が紛争を触発しました。それは1897年、スイスのバーゼルで開催された最初のシオニスト会議の席上でのことでした。それ以来、ユダヤ人は何千人という単位でパレスチナに移住してきました。とくに1940年以降はそうです。彼らは高い教育水準と共に武器を持ってきました。そしてお金も持ってきました。1948年に国連は分割案を提出し、当時大多数であったパレスチナ人と少数であったユダヤ人に土地を二分しました。その分割案をパレスチナ人は拒絶しましたが、そのときパレスチナ人は、ソロモン王と、子どもを取り合う二人の母親の話を引き合いにしたものです。

話を簡単にしますと、その後戦争が起こり、ユダヤ人は78%の土地を占拠することになりました。さらに1967年、ユダヤ人は残りの土地も占拠しました。ガザ地区とヨルダン川西岸です。その後、国連決議が何度もなされました。占領地からイスラエルに撤退を要求する決議です。そして難民となっているパレスチナ人の帰還を承認するものでした。1948年から51年の間にイスラエルは400にのぼる村落を破壊しました。その意図はパレスチナ人が故郷に帰れなくすることです。そういう人たちが今、中近東諸国で難民として多数存在するのです。何度もこの二つの民族が合意に達するために努力が払われました。国連決議242号と338号は、イスラエルは東エルサレムを含むヨルダン川西岸とガザ地区から撤退すべきだと明確に述べています。また194号はパレスチナ難民の帰還の権利、あるいは帰還を望まない者には補償される権利があることを決議しています。イスラエルは国連、あるいは安全保障理事会の決議を無視し続けています。無

視しているばかりか、さらに土地を奪取することの続け、その結果パレスチナ人を悲しみと屈辱に追い込んでいます。

●平和への希望

1985年当時でさえ、アラファト議長はイスラエル国家の存続を承認する用意があると声明しています。当時のアメリカ国務長官であるシュルツの支持のためでした。これはアメリカによる、パレスチナ人が自らの国を設立するための一大条件であったのです。それから20年間、アメリカは、パレスチナ・イスラエルの平和構築のためにほとんど何もしていません。アメリカ政府のことを思うとき、二つのアメリカを思い浮かべます。その一つはアメリカ大陸に元から住んでいた先住民を殺戮しつくしたアメリカ、もう一つはエイブラハム・リンカーンに代表されるようにイギリス植民地から自らを解放したアメリカです。もう一人のエイブラハム・リンカーンが生まれるまで、アメリカはシオニストの虜になっているとしか思えません。国連がアメリカ政府を支持しつづける限り、中近東における平和への希望は非常に小さいと言わざるをえません。

パレスチナ人は確かに平和への道を歩もうとしています。国連決議に沿ってイスラエル国家の存続を認めています。1993年9月13日のオスロ合意に署名したことによってそれは明らかです。世界中の人たちはその時、ある希望を見いだしたのです。著書を読んでもくださった方はお分かりだと思いますが、私はその日を「良い月曜日」と呼びました。「良い金曜日⁽⁴⁾」に因んでのことです。聖金曜日のことを、アングロサクソン

*編註：日本では「聖金曜日」、「受苦日」等と呼ぶ。キリストが磔にされたことを記念する日、復活祭直前の金曜日。

圏では「よい金曜日」と呼びますが、中近東では「悲しみの金曜日」と呼びます。スカンディナビアでは「長い金曜日」と呼ぶそうです。オスロ合意の日を私が「良い月曜日」と呼んだのは、「悲しい、長い」日であるとの意味も含んでいるのでして、それは殉教者の血が流されないと思わせる日でもあるのです。

オスロ合意以降、最初に流された血がパレスチナ人の血ではなかったのは不幸なことです。それはラビン首相の血だったのです。彼はアラファト議長とともにオスロ合意に署名したのですが、自分の同胞であるイスラエル人によって暗殺されました。暗殺者が誰であれ、そのことはオスロ合意でもたらされた小さな希望を打ち砕くものでした。

この流血と苦悩を終わらせるために、多くの提案が多くの人々から出されています。アラブ諸国も3年前からイスラエルと何らかの合意をしようという動きもあります。今の占領地からイスラエルが撤退するという条件のもとにです。バイルートでアラブ諸国の首脳会議がもたれたのですが、私も招かれていてシャロンが来るかどうか尋ねられたのですが、私はシャロンに24時間の猶予をあげてを提案しました。その翌日、何とシャロンはラマラに行き、パレスチナ自治政府の建物を爆撃しました。2月にいらっしゃった日本の訪問団の皆さんもご覧になったように。それはいまだに半壊状態です（頁右下の写真参照）。

私たちに残されているこの紛争解決の道は何でしょうか。私は二つのことを考えます。一つは、二つの国があので共存する可能性です。国連決議にしたがってイスラエルがパレスチナの自由な独立国家を、パレスチナの地を認める

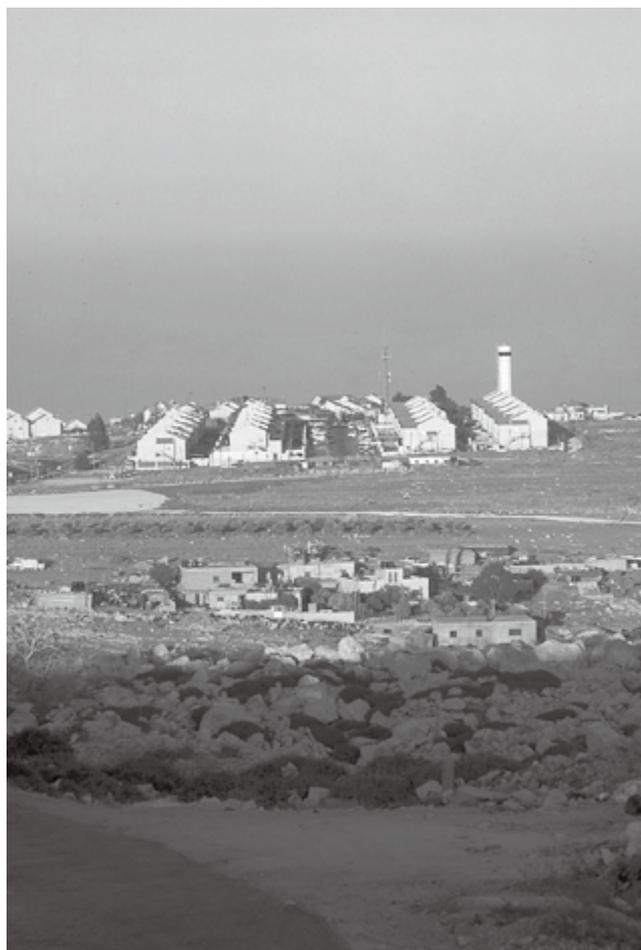
こと、もう一つは、二つの国民を持った一つの国家という可能性です。イスラエルはこの案には賛成しないでしょう。イスラエルはおそらく不利になるからです。今、あのでには550万人のユダヤ人が住み、450万人のパレスチナ人がイスラエル地域、ヨルダン川西岸、ガザ地区、及び東エルサレムに住んでいます。パリのソルボンヌ大学で開かれたシンポジウムでは、2014年には、パレスチナ人の人口がユダヤ人の人口を凌駕すると予想されていました。

ユダヤ人はパレスチナ人がみんな馬鹿だとは思っていません。50年にわたる苦難と差別を、私たちは生き延びてきたのです。多くのパレスチナ人が様々な分野で教育を受けて成功しています。実のところ、パレスチナ人とユダヤ人の中には共通な基盤があることが分かってきました。双方とも大変に勤勉です。パレスチナ人のことを、アラブ人の中のユダヤ人だと言うイスラエル人さえいます。両民族とも権利のために闘う堅固な意志を持っています。双方ともそれぞれの運命をかけて死ぬ覚悟ができています。私はこの二つの民族が死ぬためではなく、生きるために命をかけてほしいと願っています。国際社会が強い意志をもって協働しないかぎり、それが実現するには長い年月がかかるでしょう。

国際社会は、例えば南アフリカのアパルトヘイト政策に関しては大きな声をあげました。今イスラ



爆撃されたパレスチナ自治政府の建物
(故アラファト議長のオフィス)



エルサレム近郊パレスチナ自治区、手前はパレスチナ人の村、奥はイスラエル入植地。 写真：大島俊一

社会はイスラエルに対して国連決議を守るよう圧力をかけるのでしょうか。イスラエル政府に関しては、アメリカの聴衆に向かって話すときには、こんな話をします。「もし自分に愛する人がいるなら、その人を鎖でくくっても天国に連れて行けという教えがコーランの一節にあります。もしイスラエルを愛しているなら鎖でくくっても、イスラエルに国連決議を守らせるべきです」。今こそ平和を愛する人々が手をつなぐときです。平和への、正義への、

道はあるのです。私たちは既に重要なステップを踏みだしています。紛争の両者がお互いにその存在を認めることが平和への第一歩です。イスラエルはアラブを認め、アラブはイスラエルを認めることです。今こそ国際社会は、平和はあらかじめ用意されているものではなくて、平和はある段階を踏んだ結果として実現するものだ、ということを確認しなければなりません。

イスラエルは安全を最優先し、安全な国境を求めています。それは和解しあった隣同士でのみ実現することです。イスラエルの最も近い隣人はパレスチナ人です。ヨルダンとエジプトとイスラエルは平和条約を結びました。しかしパレスチナは蚊帳の外にあり、いまだ平和はありません。

●おわりに

昨年2月18日、イギリスのブレア首相と会談した時に申し上げた言葉を持ってこのスピーチを終わりたいと思います。ブレア首相と会ったのは、イギリスがイラクに派兵しないよう要請するためでした。彼は、派兵は中近東に平和をもたらすためのだと私たちを説得しようとしていました。発言の番が来たとき、こう申しました。「バグダッドへの一番の近道はエルサレムを通ることですよ」。そして続けて言いました。「エルサレムに平和がもたらされれば、世界に平和が来るのです」と。

ここにいらっしゃる全ての日本の皆さんに、同じことを申し上げたいと思います。エルサレムに平和をもたらすこと、それが世界平和への近道です。皆さん、どうかこの状況知らないなどとおっしゃらないでください。自分たちは数が少ないともおっしゃらないでください。自分たちは日本の指導者ではない、ともおっしゃらないでください。初代教会の信徒たちの数は、ここにいる全ての人よりずっと少なかったはず。彼らは数も少なかったし、有効な手段を持っていたわけでもありませんでした。日本人のように高度な技術を持っていたわけでもありませんでした。しかし、彼らは強固な意志と勇気を持っていたのです。そしてその後の歴史の道筋を変えていったのです。11人のガリラヤ人は世界の歴史を変えました。今、世界中には2億人のクリスチャンがいます。どうぞみんなで手を携えて中近東の歴史を変える道を歩んでください。いつか、私たちが愛し、また皆さんが愛しておられるあの土地で、キリストの復活のお祝いを共に喜べるように心から願っています。ありがとうございました。

エル／パレスチナで起こっていることは、南アフリカのアパルトヘイトより悪い状況です。イスラエル政府が建設している隔離壁、ガザ地区とヨルダン川西岸の700ヶ所に及ぶチェックポイント(検問所)。そこでパレスチナ人が味わう屈辱とはどんなものか、想像できるでしょうか。何人の病人が検問所で止められて病院に着く前に亡くなったことでしょうか。何人の女性が病院ではなく、検問所で出産したことでしょうか。何人の女性や子ども達が検問所で辱めを受けたでしょうか。

60年前に抑圧を受けた民族が今は抑圧者となっているというのは、なんと悲しいことでしょうか。国際社会はアメリカの主導のもとにイラクに対しては随分大きな行動を取りました。国連決議に従わせようとしたのです。いつ、国際

質疑応答

●パレスチナにはいつからクリスチャンがいるのですか？

「自分はアラブ・クリスチャンだ」と申しますと、「あなたはいつキリスト教に改宗したのか」とよく尋ねられます。それで「マホメッドが生まれる前からのクリスチャンの家系だ」と答えます。私たちのキリスト教信仰は紀元33年にさかのぼります。使徒言行録2章11節にその証拠があります。「ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに…」と書かれています。最初の聖霊降臨日に私たちはエルサレムにいたのです。すみません、日本人は使徒言行録には全然出てきません！私たちは信仰を2000年間守ってきたのです。

イスラム教が勃興したときにアラブ・クリスチャンは教会を離れたのですが、これには2つの理由がありました。1番目の改宗の理由は「三位一体」です。離れていった人々は三位一体というキリスト教の教義に確信を持てなかったのです。アラブ世界では父なる神、

母なる神、子なる神はありましたが、聖霊なる神という観念はありませんでした。それに対して、マホメッドは神さまはただ一人だと言った。すなわちアラーの神です。1 + 1 + 1 = 3なのに1であるというのは普通のアラブ人にはなかなか理解されませんでした。そこでマホメッドを信じるようになった人たちが出ました。マホメッドの最初の夫人はメッカのキリスト教会の信徒でした。

2番目の理由は政治的なものです。6、7世紀の頃、ビザンチン帝国の人たちはアラブ・クリスチャンに対してたいへん厳しい態度をとりました。ですから、アラブ・クリスチャンの多くはマホメッドに従うことにしました。その人たちはこの新しい信仰が新しい宗教になるとは考えもしませんでした。それによって当時のアラブ・クリスチャンの75%の人たちがイスラム教に加わりました。

それから300年経って十字軍がやってきました。十字軍は十字架を掲げてやってきたのではなく剣を持ってやってきました。アラブのクリスチャンたちは、やってきたクリスチャンたちは一体どういうクリスチャンなのかといぶかりました。今、ブッシュ大統領はクリスチャンだといっていますが、一体どういうクリスチャンかと思えます…。ブッシュ大統領も十字軍も、クリスマスツリーを背負って、武器を持って闘いに行くというクリスチャンです。

第1次十字軍が引き上げた後、最初の宣教師たちがやってきました。この宣教師たちは「より良いアラブ・クリスチャン」を育てるのではなく、「より良いイタリア・クリスチャン、より良いギリシャ・クリスチャン人、イギリス・クリスチャン」を育てようとしたのでした。私たち聖公会に属する

キリスト者もイギリス人に仕立てられようとされました。エルサレムのクリスチャンたちは東方教会の宣教師たちによって、アレキサンダー大王よりもギリシャ人らしくさせられようとしていました。もし日本から宣教師が来ていれば、日本的クリスチャンを作ろうとしたに違いありません。彼らは聖書に出てくる固有名詞を変えようとし、ヨハネのかわりにジョン、ペテロのかわりにピーターなどと変えました。それで人々は大変混乱しました。「私はいったい何者なのか?」、アイデンティティ・クライシスですね。その結果、多くのローマ・カトリックの人たちは、ローマやフランスに行きました。聖公会の人たちはイギリス、オーストラリア、アメリカ、カナダに渡っていくことになったのです。

そして1948年イスラエルが建国されました。私たちはユダヤ・イスラエル人から「アラブ・イスラエル人」と呼ばれるようになりました。インドに行ったとき、アメリカから来た宣教師に、「イスラエルから来たリアさん」と紹介されました。「アブラハムの子がここにいるハレルヤ!」と叫び「神さまはあなたと共にいる。神さまは全てのアラブ人を滅ぼすだろう」と言ったのです。皆さん、驚かれますか?「私はパレスチナ人であり、アラブ人です。」私がそう言うと、アメリカ人宣教師は言葉をなくしていました。彼は、全てのアラブ人がイスラム教徒でもなく、イスラム教徒全部がアラブ人でもないことを知らなくてはなりませんでした。イスラエル人全てがユダヤ教徒ではないし、ユダヤ教徒の全てがイスラエル人でもないのです。イスラエルにいるユダヤ人よりもニューヨークにいるユダヤ人のほうがはるかに多いのです。インドネシアにはアラブ諸国のイスラム教徒よりもっと多く

●パレスチナのクリスチャン人口

イスラエルに住むアラブ・パレスチナ人クリスチャンは12～15万人と推計される。

東エルサレム、西岸、及びガザには、1994年の調査(Dr. Bernard Sabella)では、49,702人のパレスチナ人クリスチャンがいたと推計されている(自治区のパレスチナ人の1.5%)。内訳は、ギリシア正教会25,835人(52.0%)、ローマ・カトリック15,168人(30.5%)、東方典礼(ギリシア)カトリック2,848人(5.7%)、プロテスタント2,443人(4.9%)、シリア正教会1,498人(3.0%)、アルメニア教会1,500人(3.0%)、コプト教会250人(0.5%)、エチオピア正教会60人(0.1%)など。しかし、その後、特に第2次インテッファダ以降は海外移住が進み、さらに著しく減少したと言われる(自治区のパレスチナ人の約1%に)。

のイスラム教徒がいます。中東全体で現在 1600 万人のクリスチャンがいるのです。エジプトにはコプト教徒（エジプト、エチオピア等に伝わるキリスト教）がいますし、230 万人のパレスチナ人の内 2.5% がクリスチャンなのです。

●旧約聖書にはユダヤ・イスラエル人によるパレスチナ（カナン之地）の侵略が記述されていますが、アラブ・パレスチナ・クリスチャンは旧約聖書をどのように受け止めているのでしょうか。

私たちはアブラハムの子孫です。アブラハムはユダヤ人ではありません。神の約束はアブラハムに最初に与えられました。ですから、私たちもアブラハムの約束を継ぐことができます。旧約聖書に暴力が含まれているからといって、旧約聖書を全て拒否しているわけではありません。

アハブ王の事をよく例に取り上げます（列王記上 21 章）。イスラエルの王アハブ王の宮殿のすぐ横に、ナボトという人のブドウ畑がありました。アハブ王は、その土地を手に入れたかったのですが、ナボトは「先祖から伝わる嗣業の土地を譲ることはできません」といって、それを了承しません。アハブ王は腹を立てて宮殿に帰るわけですが、妻のイゼベルが入れ知恵をし、ナボトを殺させ、ナボトの土地を取りあげてしまうのです。しかし預言者エリヤが来て、アハブ王の不法な土地取得を弾劾し、その罪ゆえに王国が分裂すると預言します。イスラエルの情報



白色部分がパレスチナ人の統治・居住地域、灰色部分がイスラエル人の統治・占拠地域。
<http://www.qumsiyeh.org/palestine101/>

当局から「あなたは司祭だ。司祭が教会に政治を持ち込むのは間違っている。」と尋問されたことがあります。1976 年 3 月 30 日に起こった事件のことを彼に言いました（「土地の日」のコラム参照）。すると尋問者にあらゆる悪口を浴びせられました。彼に言いました。「もし私があなたの腕時計をかすめとろうとしたら、あなたは私を何と呼びますか？」彼は「強盗と呼ぶだろう」と言いました。そこで、「あなた方イスラエル人は私たちの土地を 97% も収奪しました。私たちはあなた方を何と呼ぶ方がいいのですか？」と尋ねました。そして預言者エリヤと同じことを言っているだけなのだと話しました。

クリスチャンとして私はいかなる暴力にも反対です。パレスチナ人であれ、イスラエル人であれ同じです。昨今、私たちパレスチナ人は誰からもテロリストと呼ばれています。「自爆テロ」事件が起

こると必ずそう呼ばれます。つい昨日も、ある人からそのような見解を聞かされました。パレスチナ人はイスラエル人がすることをすぐに学びとります。最初の自殺攻撃を敢行したのはパレスチナ人ではなくユダヤ人です。旧約聖書の士師記 16 章によるとサムソンは自らの死と道連れに 3000 人のペリシテ人を殺したとあります（※パレスチナとは“ペリシテ人の土地”という意味）。日曜学校でも「サムソンはすごいぞ！」と拍手したものです。サムソンを描いた映画を見たことがあります。やはり英雄として扱われていました。私もサムソンは英雄だと思います。しかし、パレスチナ人がサムソンの行動に倣うと、テロリストと呼ばれます。エルサレムではよくイスラエルの指導者と会う機会がありますが、自殺攻撃について聞かれると、「あなた達はサムソンもテロリストと呼ぶべきではないか。さもなければサムソンに倣う者達をヒーローと呼ぶべきだろう。」と答えます。するとイスラエルの人たちは急に黙ってしまいます。

私は 1986 年から 90 年まで 4 年の間、旅行することを禁じられました。その禁止が解かれて最初に来たのが日本でした。99 年 3 月ですが、当時は大阪が日本の首

3月30日「土地の日」

1976 年、イスラエル政府は、入植地を建設するためにパレスチナの広大な農地を接収することを決め、それに対する抗議が広がると、パレスチナ全土を戦争状態にあると宣言して、外出禁止令を出すなどしながら接収を強行した。その年の 3 月 30 日、パレスチナ人はゼネストに入り、ガリラヤ

からネゲブまでのパレスチナの町々でデモンストレーションが行われたが、イスラエル政府はその前日から重武装した軍隊を送り込み、暴行、逮捕を繰り返して、2 日間で 6 人が殺され、数百人が負傷・逮捕された。それ以来、毎年、3 月 30 日は「土地の日」としてパレスチナの抗議と抵抗のデモンストレーションが行われる日となっている。

都だと思っていました。そのとき村山牧師にお会いしたのです。彼は親切にも私が東京に行くのを助け、新幹線まで送ってくださいました。昔の預言者たちのように真実を語ることを。私たちはたとえ命を代償とするとしても、それをなさなくてはなりません。86年の7月、私は秘かな使命をもって、アラファト議長に会いに行きました。提案を持っていったのです。5人のパレスチナの音楽家と5人のユダヤ人音楽家をオーストリアのウィーンで演奏させるという企画です。アラファト議長は「いいだろう。支援しよう」と言ってくれました。それはイスラエルにとっても良い知らせとなるはずでした。ところがそれから2ヶ月も経たないうちにイスラエルに新しい法律ができて、PLO(パレスチナ解放機構)とは一切接触してはならないことになりました。それでもその音楽対話の打合せをしようと出発する2日前、「あなたの行動はイスラエルの安全を脅かす」と言われ、ユダヤ人音楽家たちとの接触が禁止され、さらに12ヶ月の接触禁止がその後何度も延長されたのです。また旅をできるようになったことは嬉しいことです。

●米国のキリスト教右派に見られる考え方にどのように対処するのでしょうか？

私は米国の保守的な原理主義的福音主義クリスチャンと出会うと、何と無知であることかと悲しくなります。その人たちは私を同じキリストにおける兄弟姉妹とは認めてくれません。彼らは聖書を用いますが、それを誤って使いますし、乱用しています。彼らの多くはいわゆるシオニストによって援助支持されています。私は米国には45回行きました。たいていこのような講演ツアーをします。

ユダヤ教の会堂でユダヤ人を相手に講演をしたこともあります。キリスト教の原理主義的福音主義の人たちの教会には招かれたことがありません。

ある時、米国でテレビを見ていましたら、イスラエルのネタニエフ首相が、テレビ伝道で有名なジェリー・フォルウェルと会っているところが映しだされていました。ジェリー・フォルウェルはネタニエフ首相に対して「あの土地は神からあなたに与えられたのです。ですからヘブロンから撤退する必要は絶対にありません」と言っていました。そういうキリスト教右派の人たちは、シオニスト運動の創始者が言っている通りに信じているのでしょう。その日、フォルウェルに電話しましたが、彼は私と話そうとしませんでした。私は新聞の取材を受けて、「もしジェリー・フォルウェルがネタニエフ首相に洗礼を受けさせることができれば、ジェリー・フォルウェルに従うよ」と申しました。真実に目覚めない人たちが結構いるものです。

またある時、平和集会で宗教の役割について話をする機会がありました。私は申しました。「宗教は水のようなものと言えます。

水は人々の渇きをいやしません。美しい庭に水を打って、もっと美しくできます。しかし、水は人々を溺れさせることもできるのです。」宗

教は、その使い方によって、いかようにも作用するのです。

もう一つだけお話しさせていただきたいのですが、インドのシーク教徒の人が列車でイギリスを旅行した時のことです。シーク教徒というのは、ターバンを巻いている人たちですね。その列車にはイギリスの紳士と一人のシーク教徒が乗っていました。イギリスの紳士はそんな人を見たことがありませんでしたので、じろじろ見ていました。シーク教徒はたいへん心静かな人たちだと言われています。それで、そのシークの人は「私はシーク(教徒)です」と言いました。イギリス人はそれを聞いてshik(シーク教徒)をsick(病気)と聞きちがえ、「ご病気ならお医者に行かなければ」と言いました。そこでシークの人は「いいえ、私は宗教のシークといったのです。するとそのイギリス人は「それなら私もそうです」といいました。つまり宗教に関して私もsick(うんざり)だといったのです。

きちんとした見識を持って、事実をあるがままに見すえねばなりません。一方的な見方や無理解は、トンチンカンな応答や対応しか生まないのです。



村山盛忠牧師とリア・アブ・エル＝アサール主教 交流集会を終えて

基調講演を受けて

日本キリスト教団牧師
村山盛忠

1959年同志社大学大学院卒業。1964～68年、日本基督教団派遣宣教師としてエジプトのコプト福音教会で都市産業伝道に従事。著書に、この体験をまとめた『コプト社会に暮らす』（岩波新書、1974年刊（絶版））がある。

●はじめに

今回日本聖公会東京教区の招きで、聖公会エルサレム教区から、リアーハ主教はじめ8人の代表団が訪日されたことを、心からうれしく思っています。この実現のために聖公会東京教区植田主教はじめ聖公会の皆様方が、多大なご尽力を下さったことを、心から感謝いたします。またこのような場で小生に発言の機会を与えて下さったことを恐縮に感じながら、感謝いたしております。

●パレスチナ問題へのきっかけ

私がパレスチナ問題に積極的に取りくみはじめたのは、リアーハ主教の発言を聞いたのがきっかけでした。1975年10月にジュネーブでWCC(世界教会協議会)主催による「キリスト教パレスチナ問題協議会」が開催され、日本キリスト教団を代表して参加しました。当時私自身は、パレスチナ問題に関心はもっていましたが、何が本質的な問題なのかは、十分には理解していませんでした。同時にキリスト者としてパレスチナ問題に関わることに對して、非常に躊躇を覚えていたことも事実でした。

1週間の予定で開催されたこの協議会には、約70人の代表者が

参加していましたが、殆どがヨーロッパ・北米からの代表者でした。協議会半ばで、あるオランダの代表者の方が次のような発言をしました。オランダのキリスト教徒たちは、ユダヤ人に対する罪責の思いをもちながら、毎年ユダヤ人との対話を求めてイスラエルへの聖地巡礼をしている。毎年継続しているが、実りある対話がなされていることを大変うれしく思っているとの主旨でした。この発言に對して、中東代表のひとりの牧師が立ち上がり応答しました。「いまあなたは、ユダヤ人との対話を求めてイスラエルにやってくるとおっしゃったが、私たちが住んでいるパレスチナの地では、一度もユダヤ人迫害は起きたことはない。ユダヤ人迫害をしたのは、あなた方ヨーロッパのキリスト教徒たちだ。私たちは、ユダヤ教徒もイスラム教徒もキリスト教徒も共存してきたのだ。あなた方ヨーロッパ人がユダヤ人を迫害してきたから、その罪滅ぼしの後始末をしているのは、われわれなのだ」と。このような発言は、これまでも聞いていましたので、アラブ側の発言として良く理解できました。ただその次の言葉に私は目からウロコが落ちた経験をしたのです。それは、「あなた方は、ユダヤ教徒との対話を求めてパレスチナにやって来るといわれるが、一度でもパレスチナのキリスト教徒との対話を求めてやって来たことがありますか」と。この発言をした牧師が当時ナザレ聖公会の司祭をなさっていたリアーハ牧師だったのです。私はこの、「一度でもパレスチナのキリスト者との対話を求めてやってきたことがあるか」という言葉を聞きながら、パレスチナ問題の本質に触れた思いがしたのです。同じキリスト者でありながら、何故パレスチナのキリスト者の存在が見えなかったのか。

か。同時にアラブ人の存在が見えなかったという事であります。ユダヤ人は見えていたのに、何故パレスチナ、アラブ人が見えなかったのか。

ここにパレスチナ問題の本質的課題が存在していることを、その時直観的に感じたのです。キリスト教史においても、また世界史においても、パレスチナ・中東世界の教会が約2000年の歴史をもって今日まで存続しながら、教会も世界も彼らの存在を無視してきたのです。パレスチナ人が見えなかったということの根底に、キリスト教の問題があることが見えてきたのです。それは現在パレスチナ人の土地が奪われ、侵略されているにも拘らず、その事実が見えてこないことに連動しています。

このリアーハ牧師の発言を機に私はパレスチナ問題に積極的に関わっていくことになりました。

●中東のキリスト者—少数者であることの意味—

今日の集会は、日本でパレスチナ問題に関わっている諸団体や人々との交流集会です。パレスチナ問題に特別に「キリスト教」の名称をかかげる必要はないとの意見もあろうかと思えます。キリスト教という宗教的次元でとらえるならば、イスラム教も同じにとりあげるべきだと反応する人々もいるかもしれません。しかし、中東世界におけるキリスト教の存在を、われわれが通常考えているような宗派のひとつとしてとりあげるのは、余りにも平面的です。そのとらえ方自体がすでに西歐的キリスト教の発想ですし、中東キリスト教史を全く理解していないこととなります。中東のキリスト者の存在は、社会的少数者としてとらえるのが、的確な理解の仕方といえます。

中東世界におけるキリスト教の存在は、当初から東ローマ帝国のビザンティン・キリスト教会から「異端」のレッテルを貼られてきました。「異端」と同時に、「反皇帝派」のレッテルを貼られたのです。東ローマ皇帝は当時の世界を統一のため、急速に勢力を伸ばしてきたキリスト教を公認し、ついに国教としました。国家と宗教の一体化です。皇帝はまず教会統一をはかるため、言語による統一即ちギリシャ語による統一を施行しました。これによって当時の地中海・中東世界の統一を目論むためです。

このような東ローマ皇帝ならびにその配下にあったビザンティン教会に対して、アルメニア、シリア、エジプトの教会は、断固として抵抗したのです。この三教会はすでに民衆の言語による礼拝が守られ、聖書が読まれていたのですから。即ちアルメニア語、シリア語(アラム語)、コプト語です。抵抗したこれらの教会は、「反皇帝派」といわれ、異端宣告されたのです。実際は教義上の問題ではなく、反皇帝の姿勢にあったのです。その根底には非常にナショナルな意識が存在しているのは当然のことですが、これは現在もこの地域に息づいています。パレスチナ問題の根底には、このような歴史的背景が根深く存していると思えます。

その後ラテン教会(カトリック)が勢力をもちはじめた中世時代になりますと、中東世界は十字軍の侵略を受けます。中東世界は東ローマ帝国・ビザンティン教会からだけでなく、ラテン教会からも弾圧を受けます。中東のキリスト教会は、ビザンティン教会とラテン教会の二つの勢力と対峙せざるを得ない歴史を踏まえてきたことを知っておかねばなりません。

十字軍時代、中東のキリスト教徒たちはイスラム教徒たちと共に十字軍と闘っています。当時中東キリスト

教徒の敵は、イスラムではなく、西欧キリスト教を標榜するラテン王国でした。勿論イスラム世界にあってはキリスト教徒は少数者です。時にはイスラム教徒から、西欧キリスト教徒と通じているのではないかとの、疑いの目で見られることもありました。これはいつの時代でも起こるべくして起こる問題ですが、権力者による巧妙な分断政策のなせる業といえます。事実は中東世界のキリスト教とイスラムとは共存していたのです。

このような歴史的背景を理解するとき、中東世界におけるキリスト教の存在は、単純に宗教的次元でとらえることのできない社会的・歴史的背景を踏まえての少数者の存在意味があるのです。今日の集会がキリスト教の集会になっていますが、これは日本の土壌で受けとめられるような宗教的・信仰的次元でとりあげているのではないことを理解する必要があります。先に述べましたように社会的マイノリティからの発言として聞くことが、いちばん適切だといえます。

●「ユダヤ人問題」と「パレスチナ問題」

パレスチナ問題に関わりはじめてきたころ、よく言われたのは「お前は反ユダヤ主義者か」ということでした。1970年代に、「パレスチナ問題」の集会を開いたり、また「PLO(パレスチナ解放機構)」を口にするだけで、<赤軍派>と



ベツレヘム近くの違法なイスラエル入植地。西岸及びガザに40万人のイスラエル人入植者が住む。写真：Paul Jeffrey/ACT International

いわれたり、<ゲリラ>や<テロリスト>の側に立つのかと、白い目で見られたものです。今から思えば、日本政府もPLOをテロリストの集団と規定していたのですから、パレスチナ問題と取り組んだり、パレスチナ解放運動に連帯する組織や集会は、すべて治安の対象になったのです。支配権力者の強烈な意図を感じます(現在も同じ事をやっています)。日本では80年代末期ごろから、ようやくPLOを認知するようになったと思います。このような状況のなかで、当時人々から批判されたのは、パレスチナ連帯運動が「反ユダヤ主義」ではないかということでした。パレスチナ解放闘争は、終始「反シオニズム」の姿勢を貫いていましたが、決して「反ユダヤ主義」ではありませんでした。パレスチナではユダヤ人(教徒)と共存してきた歴史しかないのですから、「反ユダヤ主義」は生まれてきません。PLOは、「反ユダヤ主義」と「反シオニズム」を明確に区分しています。シオニズムは、ユダヤ民族主義者たちがパレスチナの地にユダヤ民族国家を建設するという政治運動ですから、パレスチナ人にとって侵略以外のなにもありません。先祖代々居住してきたパレスチナ人が、何の理由もなく追放され難民となっていくのですから、「反シオニズム」闘争になるのは当然のことです。

「反ユダヤ主義」はヨーロッパで生まれますが、これはユダヤ人に対する差別であり、根底には「ユダヤ人問題」があります。「ユダヤ人問題」という言葉が生まれてきたのは、ヨーロッパにおける近代国民国家が形成されてくる過程で、「なかなか同化しないやっかいな存在」という意味で生まれてきました(L. ダビドビッチ:「ユダヤ人はなぜ殺されたか」)。支配者は国家を統一するために民族概念を造り出して、たとえば<アングロ・サクソン民族>、<ゲルマン民族>、日本では<大和民族>という民族概念を造り出して国家を統一していったのです。他民族は同化を強いられていきます。このような経過が近代国民国家形成の過程で生まれてきたのです。

ですから、「ユダヤ人問題」の根底には、異民族同志が共存していく可能性を探る人類の課題が存在していたのですが、ナチスは本質的問題解決を放置したまま、「ユダヤ人問題の最終解決」と銘打って、約500万人のユダヤ人をガス室で「処理」したのです。このような過程のなかから、シオニズム運動が生まれました。ユダヤ人を<民族>としてとらえて、パレスチナの地に「ユダヤ民族国家」を建設する政治運動です。近代国民国家形成の過程のなかで、「ユダヤ人問題」が生まれてきたのですが、同様にユダヤ民族国家を形成する過程で「新・ユダヤ人問題」が生まれてくるのは当然のことです。これが「パレスチナ問題」です。ですから、「ユダヤ人問題」と「パレスチナ問題」とは同質の課題です。「ユダヤ人問題」と取り組めば取り組むほど、「パレスチナ問題」が問われてきますし、「パレスチナ問題」と取り組めば取り組むほど、「ユダヤ人問題」が問われてくるのです。両者の根底には、民族共存の在り方が問われている

のです。その共存の課題と取り組むのが、私たちのこれからの課題です。

●クリスチャン・シオニストの問題

特にキリスト者にとってユダヤ人(教徒)は、聖書と深い関わりがありますし、思想的にも大きな影響を受けていますので、潜在的にも心理的にもユダヤ人に深い関心をもっていることは事実です。第二次世界大戦中のユダヤ人強制収容所の悲劇も、決して忘れることはできません。ユダヤ人に深い関心をもち愛着をもつこと自体、決して批判されるべきではありません。

問題というのは、今日のイスラエル国家を「預言の成就」としてとらえることです。ユダヤ民族・イスラエル民族は、聖書で語られている<約束の地>に戻ってきたというとらえ方です。今日のイスラエル国家の建国は1948年ですから、その頃私は中学生でした。思い出してみるとイスラエル建国は聖書の預言が成就して、ユダヤ人が約束の地に戻ってきたのだ、なんとすごい事ではないかと、子どもながらに内面から湧き出てくるような喜びを感じていたように思います。日本だけではなく世界中のキリスト教徒たちが、このようにとらえ方をしてきたように思います。

しかしそのようなとらえ方(信仰)が、パレスチナで起きているイスラエル軍の侵略・占領の実態を見えなくしていたのです。侵略・占領を信仰の次元から肯定する信仰とは、一体なんでしょうか。これは聖書の読み方と深く関わってくる課題だと思います。今日のイスラエル国家を預言の成就としてとらえるキリスト者を、「クリスチャン・シオニスト」と呼んでいますが、この人々は土地を奪われ

追放されていくパレスチナ人は目に入っていません。彼らには、預言の成就こそが信仰的事実として重要なのです。

しかし聖書は、<約束の地>への帰還を普遍的真理として述べていません。聖書は歴史的状况のなかで、<約束・契約>を、<正義と公正の回復>の視点から述べたり、また民への<祝福>として述べています。私たちが聖書をどのように読むのかは、重要なことです。「クリスチャン・シオニスト」と呼ばれている人々の考え方や信仰は、結果的にイスラエルの侵略を肯定する強力なイデオロギーになっているのです。事実を事実として知ることが、大変重要なことですし、それが福音信仰だと思います。

●これからの課題

これからのわれわれの課題として、以下の項目を掲げました。地道な取り組みが共同作業としてなされるように期待します。

- ・ 中東におけるキリスト教史を知ること。
- ・ 「ユダヤ人問題」の発端ともいえる、十字軍の歴史を知ること。
- ・ 聖書テキスト、例えば「約束の地」(創世記)の箇所、「帰還の預言」(イザヤ書)、ロマ書9章―11章(イスラエルの運命)の箇所等を、共同研究すること。
- ・ 「ホロコースト以後の神学」の問題点を明確にすること。
- ・ 「9.11」以後の「テロ」戦争の状況を、パレスチナ問題との関わりでの的確にとらえること。
- ・ パレスチナ難民の復権問題に積極的に関わること。
- ・ 「エルサレム問題」に積極的に関わること。
- ・ これからの民族共存問題を課題とすること。

シャロンの弾圧政策下で向き合う パレスチナ人とイスラエル軍兵士

●荒涼たるパレスチナ

2005年2月8日、イスラエル・パレスチナ両首脳会談が4年半ぶりに、エジプトの保養地シャロム・シェイフにおいて開かれた。「武装闘争は無益」が持論で「穏健派」と目されるマフムード・アッバースが故アラファートの後継としてパレスチナ自治政府議長に就任するのを待って実現した首脳会談において、アッバースが「パレスチナ人が平和を享受する好機が訪れた」と語ると、シャロン・イスラエル首相は「パレスチナが民主的な独立国家になるまで、あなたに統率をとっていつでも見たい」と友好的に応じたが、その一方で、「治安に関しては妥協しない」と述べるのを忘れなかった（「朝日新聞」05年2月9日）。

シャロン首相がとなえる「治安維持」とはあくまでもイスラエル国家

やその国民を守るためだけのものであり、シャロンがパレスチナ住民について「治安維持」を語るときにはそれを口実にパレスチナ住民を徹底的に弾圧するということであり、目をパレスチナに転じれば、そのことを物語る凄惨な光景が続いている。

2000年9月にパレスチナ住民の反占領闘争である第二次インティファダが再燃してパレスチナがイスラエルの完全占領下に戻ってしまったこの4年半の間に、パレスチナはかつての景観を大きく変化させてしまった。

ヨルダン川西岸地区のイスラエルとの境界線沿いおよび西岸地区全域に多数存在するイスラエル入植地のひとつひとつのまわりには、堅固な隔離壁とその両側に敷設された二本の軍用道路とからなる三重層の帯が延々と続いており、壁の周辺のパレスチナ人たちは壁建設のために農地を削られ建物を壊されて生活の場を切り崩されてしまったばかりか、壁建設によって生活道路も寸断されて通勤通学その他の目的のために自由に移動することもできなくなり、パレスチナ人の住む場所は外界から閉ざされたゲットー状況へと追い込まれてしまった。

ガザ地区でも事態は同じで、イスラエル入植地周辺やエジプトとの国境地帯ではパレスチナ難民キャンプの住宅街が占領軍によって大きく削り取られてそのあとに堅牢な壁が建設されていき、隔離壁がパレスチナ人の生活を押しつぶす光景が広がっている。

こうした変化の全ては、シャロンが首相就任後にパレスチナにおける「治安維持」と称して次々に繰り出

してきた軍隊導入による暴力一辺倒の施策の結果である。首脳会談を眺めるパレスチナ住民は、ブッシュ米政権の強力な支援を後ろ盾としたシャロンがこれからもパレスチナ占領を続けてどのような弾圧と生活破壊の手を打ってくるのかと暗澹たる気分になった。

●シャロンの飽くなき「治安維持」の追求

シャロンはイスラエル建国以来長きにわたり筋金入りの軍人として生きてきた人物であり、彼は国家安全保障を重視する立場からアラブに対する徹底した武断主義を貫き、1970年代初頭イスラエル軍事占領下ガザの軍司令官時代にパレスチナ人反占領武装闘争鎮圧のために闘争拠点と化している難民キャンプに大型軍用ブルドーザーを持ち込んでの住民家屋大量破壊や住民国外追放を含む徹底的武力弾圧策を講じたことや、82年国防相としてレバノン侵攻作戦を指揮した際にイスラエル軍包囲下のベイルートで起きたサブラー・シャティーラ難民キャンプ住民大量虐殺事件に深く関与したことなどによって知られている。

またシャロンはイスラエル建国思想シオニズムの熱狂的な信奉者であり、91年住宅相として「イスラエルがジュディア・サマリア（ヨルダン川西岸地区のこと）およびガザから撤退する計画などは過去にも将来にもなく、我々は入植地を過去、現在、将来にわたって建設し続ける」との主張のもとに、パレスチナ住民の土地没収による植地建設の大規模な拡大を手がけた。シャロンはラビン労働党政権が締結したイスラエル・パレスチナ平和協定に反対し、

東京外国語大学教授 アラビア語コース
アラブ現代史（パレスチナ問題）

藤田 進

1990年の湾岸戦争当時、ガザが封鎖され、二重の抑圧を強いられているパレスチナ人に対する緊急支援の必要性を感じ、またパレスチナと日本の民衆同士が知り合うパイプ作りとして「アハリー・アラブ病院を支援する会」を村山盛忠氏と立ち上げる。その後、この会の発行する「アイヤーム アハリー」で病院やパレスチナの状況、エルサレムをめぐる状況を発信するために「エルサレム行動委員会」を結成し『エルサレムからの手紙』を発行。また当時のアハリー病院の理事長サミール・カフィーテーイ司教や、パレスチナ人の映画監督ミシェル・クレイフィと音楽グループ・サーブリーンを日本に招いての交流、パレスチナにオリーブの苗木を送る活動等に参加。

同協定が約束したヨルダン川西岸地区とガザ地区における占領の終結とパレスチナ自治の実現とを阻止するために入植者を指揮する立場にあった。

シャロンは2000年9月、イスラエル警察を引き連れて自らエルサレムのイスラム聖域に立ち入り「ここはもともとはイスラエル神殿であり、我々に権利がある」と発言してパレスチナ人ムスリムの反発を引き出し、西岸・ガザのパレスチナ全土がイスラエル軍撤退とパレスチナ自治実現を要求するパレスチナ住民とイスラエル軍および入植者とが全面対決する局面を迎えるや(第二次インテファード開始)、シャロンは「イスラエル国民の治安維持」を訴えて、02年2月イスラエル政権の座に就いた。

首相就任早々からシャロンの武断主義は遺憾なく発揮され、パレスチナ自治を完全に無視してイスラエル軍の大量投入がなされた。パレスチナ自治政府議長アラファートとの話し合いに応じないばかりか彼を軍事的に長期幽閉してついには死へと至らしめた。シャロンはパレスチナ軍事占領を「イスラエルの治安維持のため」とし、パレスチナ住民の占領に対する抵抗を「テロ活動」と断じてこれの軍事的鎮圧をはかり、パレスチナ人の抵抗拠点とみなすジェニン難民キャンプを全面封鎖して徹底破壊する拳に出た(ジェニン難民キャンプ虐殺事件)。こうしたシャロン首相の姿勢を前にしてパレスチ

ナ人・イスラエル人双方の治安は一気に悪化し、05年2月20日にいたるまでの死者はパレスチナ人3394人、イスラエル人952人という膨大な数に上った。

●無差別攻撃を命じる軍指揮官の差別意識

シャロン政権下のパレスチナにおける占領軍の民衆抑圧の具体像を具体的に見れば、ガザ南部ハーン・ユニスにおける以下のような現地報告に浮かび上がってくる。

「04年12月17日深夜、イスラエル軍戦車がアパッチ・ヘリコプターの空爆に支援されてハーン・ユニス難民キャンプに侵攻した。死傷するのが嫌なら家を立ち去れとのイスラエル占領軍の呼びかけがスピーカーを通して近くのネヴェ・デカリム入植地の方から聞こえてくるや、ニムサーウィ地区のパレスチナ人数百家族、約600人は家の外へと飛び出した。モスクや病院のなかに逃げ込んだ者たちもいるが、多くは危険の及ばない路上に避難してうずくまった。

イスラエルのメディアによれば、この住民地区への攻撃は、ハマス軍事組織がネヴェ・デカリム入植地にロケットを撃ち込んでイスラエル人数人を負傷させたことへの報復であり、イスラエル軍スポークスマンは、必要とあらば砲撃、狙撃、住宅破壊を数日間続ける用意があると述べた。

攻撃による住民側の死者は夜明け前に4人、明るくなってから6人を数えた。イスラエル軍戦車は小学校を砲撃して生徒7人と先生が倒れ、「屋根の赤色灯が兵士にはっきり見えている

のにあえて狙ってくる」(救急車運転手のハサン・アブー・サムラ)と、いうように戦車砲撃は救急車も容赦しなかった。イスラエル軍は高い建物の屋上を占拠して狙撃体制を敷いており、本報告を書いている最中にも16歳の少年が通行中を狙撃されて殺されたとの知らせが伝わってきた。ハーン・ユニスは誰も死から逃れられない極めて危険な状態にあり、死傷者数は急速に拡大している。

ガザ地区は全土にわたってイスラエル軍検問所が設けられていて多くの小区画に分けられており、町や村はどこも孤立状態となっている。アブー・ホーリ検問所付近の海岸沿いの路もブルドーザーで破壊されて通行不能となり、住民の往来はほぼ完全に不可能となった。」

(以上は、Reports from Rafah-Palestine より)

<http://rafah.virtualactivism.net/gazanews/gazamain.htm>

イスラエル軍は住民地区への攻撃を「ハマス軍事組織による入植地攻撃への報復」だと説明するが、アパッチ・ヘリや戦車まで動員して無防備のパレスチナ住民に無差別攻撃を加えるやり方は常軌を逸しており、イスラエル軍がしているのは集団的殺戮行為以外の何物でもない。パレスチナ人にはハマスのメンバーやその支持者が少なからずいるにしても全員がそうだというわけではなく、パレスチナ住民の立場は様々である。そのことを度外視して「パレスチナ人=ハマス」と一括化し、無差別攻撃を指示するイスラエル軍指揮官にはそうしても構わないという割り切った考えが見てとれる。

イスラエル軍指揮官や兵士の一人一人はイスラエル国民であり、兵役任務が終了すればイスラエル国家に庇護された生活の場へと帰っていく。一方のパレスチナ人は何ら公的な拠り所を持たない無国籍の難民であり、四六時中生活を占領軍や入植者の攻撃に脅かされている。両者のこの違いを踏まえてイスラエル軍指揮官の姿をとらえれば、「ハマス=



イスラエル兵によって攻撃された救急車。中に乗っていた医師は死亡した。(ジェニン) 写真:大島俊一

パレスチナ人」と一括化して攻撃を指示する彼には眼前のパレスチナ難民が自分と同じ人間とは映っておらず、彼らに対する蔑視ないしは差別意識が指揮官をとらえているということである。

この蔑視ないし差別感、土地を奪っておきながらそれを取り返されまいとして暴力に訴える入植者の心中にも見出せる。このイスラエル人側のパレスチナ人への蔑視ないし差別感、シャロン等のイスラエル国家を動かす支配層が国民にシオニズムイデオロギーの教育と徴兵義務とを施すことを通じて養われてきた。

●パレスチナ難民の素顔

筆者は03年8月、ハーン・ユニスのイスラエル軍によって破壊された場所を訪れ、集合住宅が空爆で破壊されて巨大なコンクリートの塊と化しており、ブルドーザーで押し潰された家々の残骸の間からは貯水タンク、ベッドの脚といった犠牲になった人々のかつての暮らしの断片が覗いているのを目撃した。

その日は金曜日で、近くのモスクから集団礼拝を終えた男たちが現われ、その中の一人のパレスチナ自治政府職員(45歳)が家に来よう誘ってくれた。彼の家はイスラエル入植地ネウァ・デカリムのすぐ近くにあり、占領軍によって破壊された家と同じ場所に建て直している最中で、室内のいたるところに銃弾の痕があり、家族は弾のとどかない場

所を選んで暮らしているのだという。家の主は「恐ろしいが、他に生活できるところはなく、家族だって殺されるかも知れないがここで生き続ける」と語り、軍監視塔から見えないように頭を下げながら案内してくれた庭には、菜園がつくられ鶏も飼われていた。

さらに案内されて行ったところに、70歳の老人がいた。老人の家もイスラエル軍に破壊されてしまい、彼は家族を他のところに移して家の跡地にトタン板の小屋をつくって一人で暮らしており、周りの砂地にはわずかな菜園やマンゴーの畑もつくられていた。老人は、今はイスラエル大都市のテル・アビブに吸収されてしまったヤーファを故郷とする元農民で、1948年イスラエル建国のとき16歳で故郷の地を追放され、50年国連がガザに建設した難民キャンプに収容され、そこで半世紀以上のときを無国籍のパレスチナ難民として生きてきた。

70歳の老人も、故郷を知らない45歳の自治政府職員も、難民キャンプで暮らしながら努力して自分の家を建てることにこぎつけたが、家はイスラエル軍によって破壊されてしまった。二人は残骸を取り除いて再び住処を築き、軍の監視塔から狙い撃ちされる危険にさらされながらもお茶を交わしながらあくまでも生きていこうとする。

ハーン・ユニス難民キャンプの老人が「治安上の理由」でイスラエル軍ブルドーザーによって自分の家を押つぶされた残骸の前で、「イスラエルは平和など欲していない。彼らが望んでいるのは、土地を吸収することとパレスチナ人を殺すことだけだ」と

述べた。その言葉は、筆者の会った二人の難民の言葉でもあるだろう。イスラエルのパレスチナ住民に対する軍事抑圧はどこまでも続くしかないのか。

●占領軍兵士の兵役拒否運動

だがこの異常事態を黙過できないとする動きがイスラエル軍内部でも、パレスチナ人攻撃への疑問や抵抗感から兵役拒否をする運動となつてまだ微弱ながらも確実に広がり始めている。

「朝日新聞」02年2月26日付けの報道によれば、同年1月下旬にイスラエル兵士50人が新聞に、「占領地での自治区封鎖や住居破壊、検問などの任務がパレスチナ人を抑圧し人権を侵害している」、「占領地の軍務が西岸とガザに120カ所以上あるユダヤ人入植地を警護し維持することに結びつき、『本来の国防と関係がない』」との批判を掲げて兵役拒否を呼びかける「拒否の手紙」を発表し、賛同者は翌月5日までに170人を超える迄になったという。

「拒否の手紙」呼びかけ人のひとり、ガザ自治区南部で入植地警護の軍務についていたダビド・ゾンシェイン中尉は占領軍がパレスチナ居住区を破壊するときの模様について、「何かじゃまなものがあれば、司令官は機械化部隊を呼び、ブルドーザーで平たんにする。住宅の破壊は日常茶飯事だ。軍の監視所はパレスチナ側からの銃撃を受ける。そうすれば司令官は反撃として住宅破壊を命じる」と具体的に証言したという。イスラエル政府や軍が占領地で兵士たちにやらせていることはパレスチナ人を痛めつける暴力行為に他ならないことに軍務遂行を通じて感じ取り、それに耐えきれなくなった者が兵役拒否という行動に出たとき、彼は国民的兵役義務を侵すだけでなく国家イデオロギーたるシオニズムを批判する立場につくことをも意味した。



訓練するイスラエル兵 写真：大島俊一

シオニズム批判はもとよりパレスチナ人の立場であり、イスラエル軍兵士側の変化は、占領者と抵抗者として対決する者同士が批判の共通基盤に立つことによって理解しあう可能性が開けてくることを意味しているのかもしれない。

●アラブ住民の聖書理解とシオニズム批判

パレスチナ人側のシオニズム批判はその暴力的排他性、つまるところ旧約聖書の「エレッツ・イスラエル」という言葉をめぐるシオニズムの解釈への批判ということになるだろう。

この点をめぐるパレスチナ人側の最新の言及は、今回来日したリア・アブ・エル＝アサール牧師の著作に明快である(リア・アブ・エル＝アサール/興石勇訳『アラブ人でもなくイスラエル人でもなく』聖公会出版2004年)。アサールは次のように述べている。

「シオニズムは非宗教的な運動として始まった」「しかし、ユダヤ人国家の樹立は、まず、神が彼らにそこに住む独占的な権利を与え、ヨシュアやイスラエルの王たち同様に、力によってその地の先住民を殺したり追放したりすること、あるいは、彼らを「伐採人や水汲み人」として従属させ、土地を没収する権利を与えることを内容とする、予言の成就、また、神とその選民との再契約として認識されるようになったのである」。

アサールは上記の説明において、シオニズム(ユダヤ人国家実現運動)が旧約聖書に描かれた「ユダヤ人国家」の他民族を暴力的・差別的に扱うという特徴を20世紀に実現する国家の特徴としてそのまま持ち込んだ結果、イスラエルはきわめて暴力的・排他的な国家として実現したと主張する。その主張は、ナザレでイスラエル建国の時を迎えたアサールの一家が異教徒故に追放され、辛うじて故郷に戻ってからも「現存する不在者」とされて財産は没収され、

アラブ人として蔑まれるという自らの体験を踏まえてのものであり説得的である。

さらにアサールは続ける。「私は聖書のイスラエルを、特定の部族—ユダヤ人やイスラエル人—の国と考えたことはなく、神とその民の契約およびその民へ

の神のご加護の象徴だと思っている」、従って「旧・新約聖書を自分の信仰の根源と考えている」、「ユダヤ人とパレスチナ人のいずれにとっても、聖書は我々の霊的な手引きであるばかりでなく、我々の歴史の記録であり、我々が土地に自らの根拠を持っていることの証拠でもある」「アラブ人のムスリムもクリスチャンも自分たちのことを、アラブ人全体の始祖とされるアブラハムの長男であるイシュマエルの契約の正しい継承者と考えている(だから、私たちはユダヤ人を自分の従兄弟と呼ぶのである)」「パレスチナ人である私は、私の先祖がベリシテ人の中にいたと考えている」等々。

それらはパレスチナのアラブ人の独自の聖書解釈に基づく主張であるが、そこには、自分は古代からずっとパレスチナで生きてきた者たちの子孫であるというこの地に根ざした者ならではの確信が認められるとともに、パレスチナは歴史上様々な宗教的・民族的違いを生みだしてきたが、人々はそれらの違いに関係なく一緒に暮らしてきており勿論そこにはユダヤ人(ユダヤ教徒)もいたという歴史的現実こそパレスチナ人の姿を見出そうとする立場が認められる。アサールのひもとく「パレスチナ人」論は、他者を含み込んで自らも変わっていけば良いとの考え方に立っており、シオニズムが自前の国家の実現という動機に基づいて旧



パレスチナの不法占拠に抗議して、毎週街角に立つイスラエルの女性("Women in Black"のメンバー) 写真: Paul Jeffrey/Action by Churches Together(ACT)

約聖書における「ユダヤ人国家」神話を字句通り固定的に取り上げて、それを根拠にユダヤ人についてだけ語ろうとするのに比べると、解放的であり躍動感を感じさせる。

シャロン首相が「反テロリズム」路線のブッシュ米国大統領に支援されて、占領を「治安維持」と言い換えてパレスチナ人に対する武断主義を貫いていこうとする時、イスラエル国民は「パレスチナ人テロの脅威」という理由によってどこまでも「治安維持」政策に頼っていくのだろうか。それとも「伐採人や水汲み人」といった聖書の差別用語に煽動されてパレスチナ人蔑視や差別感へと押しやられることから自由になってパレスチナ民衆と対等につきあう方向を切り開いていくのだろうか。友好のエールはイスラエル人からパレスチナ人へと送られるべきであり、イスラエル兵士の兵役拒否運動がそのような方向を広げることに期待を込めたい。



東エルサレムのオリーブ山で葡萄を摘む少年 写真: Paul Jeffrey/ACT

子どもたちの願いと現実

特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン

事務局長 田中好子

「先生になりたいな、もし大人になれたらね」。

パレスチナのジェニンにある難民キャンプに住む14歳の少女の言葉です。ジェニンは、パレスチナのヨルダン川西岸地方の北部にあってアクセスが難しく、最近では「隔離壁」によって周囲を取り囲まれています。難民キャンプにはイスラエル建国によって、故郷の村を追われた人々が住み着き、いまでは子どもや孫の世代など約2万人が住んでいます。しばしばイスラエルの軍隊が進入し、外出禁止令が出され人々が逮捕されます。特に2002年の春には、大規模な侵攻で数百軒の家が破壊され50人以上が亡くなりました。この少女も4日間水も食料もないまま閉じ込められ、家の壁も破壊されました。その後も兵士が家の中に入ってきて銃を乱射しました。学校も半年間ほとんど授業ができない状況が続きました。こうしたなかにあって、戦車の横をとおりながらも子どもたちは学校へ行き、勉強し夢を実現しようとしています。



軍用車に追いかけられる子ども達（ラマラ） 写真：大島俊一

●子どもの状況

パレスチナでは人口の半数が15歳以下の子どもです。この子どもたちが生と死に直面しています。イスラエルによる軍事占領は40年近く続き、戦争状態のなかで、多くの子どもたちが様々な被害を受けているのです。通学途中や教室の中、買い物帰りや遊んでいる最中などに銃撃などで亡くなった子どもの数は過去4年間に872人にのぼります。

2002年夏に行なわれた聞き取り調査の結果によると、パレスチナでは93%の子どもが安全でないと感じ、48%は自身あるいは身近な人間が直接的な暴力行為を受けていました。また21%の子どもが家から一時的あるいは半永久的に退去させられていました。半数の子どもは、親が自分のこと

を守れないとも感じていました。聞き取り調査の概略をご紹介します。

「子どもたちが感じているストレスは、親には子どもの面倒を充分に見るだけの余力がないという諦めの感情によってさらに悪化している。これは調査対象の半数以上(52%)の子どもたちが抱えている感情であり、やや年長の子ども(59%)に多く見られた。経済的・物質的な限界、統制不可能な外的現実を別にしても、子ども達

が保護者(両親や教師)から受けるケアは充分とは言えない。これは、保護者自身がストレスを受けて欲求不満に陥っており、子どもたちが必要とする心理社会的サポートをするだけの情緒的・精神的エネルギーをなくしているためである。

このような状況下では、子どもが屈託なく育つことは難しい。したがって10人中9人の親が、自分の子どもの注意持続時間や集中力が減っただけでなく、悪夢にうなされたり、寝小便をするようになったり、攻撃性や多動性が増したりといった精神的な外傷を受けた兆候を示す行動があると報告して

いるのは驚くには当たらない。子どもが死と復讐という考えに取り憑かれたようになっていてと報告する親も5～8%ほど見られた。

周囲が暴力的で予測不能の事態に満ちているため、子どもに対する親の監督能力が損なわれている。インタビューを受けた親たちの半数近く(43%)は、現状では子どもが必要とする世話や庇護を十分に与えてやることができないと感じながらも、子どもたちに責任を感じて気を配っている。すべての親は、本当の意味で子どもを保護・扶養するには、政治的・経済的レベルでの著しい変化が必要であると感じていた。

しかし不運な状況とその結果として生じたしわ寄せにも屈せず、パレスチナの子どもたちは依然として回復力を維持している。このことは、彼らが自分たちの未来に対して楽観的な見方をしていることに最も強く現れている。大半(70%)の子どもたちは、学習に励むことで自己を改善できると感じており、個人的、社会的な努力によってもよりよい人生を築けると思っている。同様に、71%の子どもたちは自分のエネルギーを「積極的・建設的かつ非暴力的な活動」へと向け続けている。その一方で、7%の子どもたちは武器で闘わなければ問題は解決できないと答えた。」

こうした状況の中で、子どもの心理状態は不安定になり、暴力をふるったり、親の言うことを聞かなかったりする子どもが増えていきます。ジェニンの難民キャンプでは、中学生が同級生を刺殺する事件も起きて人々にショックを与えました。

●怖い思いはお母さんも同じ

心理的な不安定さはもちろん子どもだけの問題ではありません。仕事、家事、家族の心配と生活の心配…。かえって大人の方が辛い思いをしているかもしれません。封鎖によって職を失ったり収入が減ったりしたうえに、イスラエル兵から屈辱的な扱いを受け、ひどい場合には射殺されることを覚悟で検問所を毎日通らなければいけない父親たち。また、朝出かけた家族が無事に戻ってくるかどうかを心配しながら家事を片付け、乏しい家計から子どもたちに食べさせるためにやりくりをし、不安定な子どもたちを落ち着かせるのに精一杯な母親たち。ようやく建てた家が壊され、農地が奪われ、隣りの町に行くのも難しい生活があります。「子どもを守ることができない」という無力感は何よりも大人を苦しめています。

●「心のケア」のプログラム

こうした状況にある子どもと母親のために、パレスチナ子どものキャンペーンでは、ジェニンのNGO「幼児教育センター」と一緒に、3年前から心のケアのプログラムを実施しています。対象は幼児と母親、それに幼稚園のスタッフです。難民キャンプや街や村にある幼稚園を巡回して、母親の集団カウンセリングやワークショップ、先生のワークショップ、そして子どものためのレクリエーションプログラムを進め、希望にあわせて個人カウンセリングも実施しています。

不安や子育ての孤立感を感じているのは日本もパレスチナも同じです。仲間と悩みを分け合い、その解決のために専門家を交えて話し合いをしていく中で、自分だけでは解決できなかったことが解消されることもあります。また適切

に接することで、不安定な子どもの精神状態を改善できます。子どもと一緒にレクリエーションに参加することで、久しく忘れていた笑いを取り戻すこともできるのです。こうして母親が安定すると、子どもも自然に安定してくる場合が多いようです。

●子どもたちの夢の実現を

「アルナの子どもたち」というドキュメンタリーフィルムがあります。ジェニンの難民キャンプで子ども劇団に参加し、「演劇で世界にパレスチナのことを伝えたい」と考えていた無邪気な少年たちが、占領と戦争状態のなかで夢破れ、銃をもって死んでしまう、という厳しい現実が描かれています(2005年夏には日本語字幕つきで貸出しを始める予定です)。

パレスチナ子どものキャンペーンでは、ジェニンでの「心のケア」のプログラムの他に、ガザの「アトファルナろう学校」、レバノンでの補習クラスや幼稚園など、過去20年近くにわたって子どもたちへの支援を続けていますが、子どもたちが前向きに生きていけるように、絶望ではなく希望を持てるように支援することが最も必要だと感じています。

子どもたちが無事に成長し、夢を実現できるために、私たちが出来ることはまだまだたくさんあるのです。



Ti'innik 近くで。写真：Paul Jeffrey /ACT

包囲されたパレスチナ

Stop the Wall キャンペーン実行委員会

西間木公孝

2002年6月からイスラエルが建設を始めたパレスチナの「壁」とはどんなものか。また、世界各地の「壁」建設に反対する動きは何を意味しているのだろうか。

●「壁」とは何か

いま、建設中の「壁」とは、イスラエルが第一次中東戦争の停戦ラインである「グリーン・ライン」からヨルダン川西岸地区の中に深く食い込んで、パレスチナ人口が多い土地を取り囲むように建設している「壁」のことである。「壁」の全長は約730kmになる予定で、イスラエル側では「テロリスト」の侵入を阻止するための「安全フェンス (Security Fence)」と呼んでいる。現在、カルキリヤとトゥルカレム、東エルサレムなどの町で建設された「壁」は、高さ8m (ベルリンの壁の2倍) のコンクリート製であり、「壁」には、武器を備えた監視塔や30～100mの幅の「緩衝地帯」が設けられている。「緩衝地帯」には、電流の流れたフェンスや、塹壕、監視カメラ、センサー、軍用道路などが付設されている。他の場所の「壁」は、3mの高さのフェンスであり、フェンスには電流が流れ、その両側の「緩

衝地帯」には、有刺鉄線、軍事道路、足跡を残すための砂地、塹壕、監視カメラなどが設置されている。「壁」の総工事費は、約34億ドルになる予定で、1km当たり約470万ドルの計算になる。壁には通用門が設けられているが、そこを通過して農民が自分の土地に行けるとは限らない。逆にパレスチナ人は、しばしばここで殴られたり、撃たれたり、屈辱的な扱いを受けている。しかも、第一段階の「壁」(全長145km)には、現在23の通用門しか設置されていない。

「壁」が完成すれば、西岸の50%の土地がイスラエルに併合され、パレスチナ人居住区は幾つもの分断された飛び地の「軍事閉鎖地区」になり、ヨルダン川西岸地区とガザ地区に住むパレスチナ人は、歴史的パレスチナの内、たった12%の土地に押し込まれることになる。また、ヨルダン川西岸地区に住むパレスチナ人の約16%は、「壁」の「外側」、イスラエルに併合されることになる土地に切り離され、そこに住む人々は、土地の収用や移動制限などにより生活が成り立たなくなり、土地から立ち退かざるを得ない状況になるだろう。特に20万人を超す東エルサレム住民は、ヨルダン川西岸の他の地域から完全に隔離されることになる。ヨルダン川西岸のユダヤ人入植者の98%は、イスラエル側に事実上併合されることになる地域に編入されると予想される。「壁」とはそのようなものである。

●「壁」建設で何が起きているのか、これから起きるのか

「壁」の建設によって、まず、パレスチナ人が土地から切り離されることがあげられる。第一段階の「壁」の建設によって、1万2000人が住む16の村がイスラエルに事実上併合され、約50の村が自分達の農地から隔離されている。また、36の井戸が没収され、他に少なくとも14の井戸が壁の「緩衝地帯」にあり破壊される恐れがある。10万本以上のオリーブの木などの果樹が引き倒され、15平方kmの土地が没収され、最終的にはその10倍以上の土地が没収されると予測される。「壁」によって移動の自由が奪われたことで多くの住民が職を失っている。トゥルカレム地方では、2000年18%だった失業率が、2003年春には、78%に跳ね上がっている。「壁」は、パレスチナ人の生活基盤を破壊し、多くの人が援助に頼って生きらざるを得ない状況を生み出すであろう。

●「壁」の建設反対の動き

この「壁」の建設に関して、2003年10月21日、国連総会は144カ国が「壁」の建設の中止を求める決議を採択したが、安全保障理事会ではその決議はアメリカ合衆国の拒否権発動によって否決された。

2004年7月9日、ハーグの国際司法裁判所は「壁」の建設は違法で中止すべきであると勧告している。

世界教会協議会は2004年2月19日、「壁」建設反対の声明を出している。



西岸カルキリヤの町を囲むように作られた高さ8mの「壁」。
Paul Jeffrey/Action by Churches Together (ACT)

「壁」反対の動きの内、幾つかをあげてみよう。

PENGON (The Palestinian Environmental NGO's Network)

<http://www.stophthewall.org/>

このネットワークによってパレスチナのいくつかの NGO 団体がネットワークとして「反アパルトヘイトウォール・キャンペーン」を行っている。報告書の発行、情報の発信を行い、世界の「壁」反対の運動と連帯している。

EAPPI (Ecumenical Accompaniment Programme in Palestine and Israel)

<http://www.eappi.org/>

「パレスチナとイスラエルにおけるエキュメニカル同伴プログラム」。世界教会協議会 (WCC) の「暴力を克服する 10 年」の取り組みの一つ。世界の諸教会・団体から派遣されたボランティアが、エルサレム、ガザ、ラマラ、 Beit・サホール、ナブルスなどの地域で、チェックポイントを越えて仕事に出る農夫に付き添ったり、強制土地収容のおそれのある場所で座り込むなど、現場で「同伴」し、そこで経験したり、話を聞いたことを広く世界に伝えることを通して、「壁」、人権侵害の問題を訴える。

STOP THE WALL 実行委員会

<http://www.stophthewall.jp/>

パレスチナや中東の平和のために活動、協力している日本の NGO 等が、2003 年 PENGON の呼びかけに応える形で結成した団体。2003 年と 2004 年の 11 月 9 日「アパルトヘイト・ウォールに反対する国際デー」に「壁」建設反対の集会を東京で行った。「壁」に関する情報交換を NGO 間で行っている。

パレスチナの平和を考える会

<http://palestine-forum.org/>

中東における公正な平和の実現と、半世紀以上にわたって奪われてきたパレスチナ人の権利と尊厳の回復を求める活動を行うことを目的として、パレスチナ問題に関心を持つ関西在住の市民・学生を中



家の前に壁ができ、それを見つめる家族。畑に行くにも検問所を通らねばならない。
写真：大島俊一

心に 1999 年に結成された NGO。2003 年 11 月、大阪で「Peace for Palestine」とともに、「壁」建設反対の集会を行った。「壁」に関して、『パレスチナ農民が語る「隔離壁」が奪ったもの - フェイズ・タネブさん講演録 -』などのパンフレットの出版もしている。

● 「壁」を通して考えること

「壁」の問題を考えるとき、「壁」が意味することを考えさせられる。「壁」は明らかにイスラエルによるパレスチナの「占領」の事実をあらわすものであり、人種差別の象徴であろう。イスラエルとパレスチナを分離するという発想からは、互いの「信頼醸成」なるものは生まれてこないし、占領、そして差別からは、決して平和は生み出されない。そして、「壁」の建設、完成によって多くのパレスチナ人の生活が破壊されることを私たちは考えるべきである。パレスチナ人は生きている。私たちはこの事実から目を離してはいけない。生きる権利を阻害する「壁」は断じて許すことはできない。

女優の黒柳徹子さんが 2003 年、東京で行われた STOP THE WALL キャンペーンの集会に寄せてくだ

さった言葉は、私たちにとっての「壁」とは何であるのかを考えさせるのではないだろうか。

「なぜ壁を作るのでしょうか。子どもたちが希望をもって生きられるように、恐怖や憎しみ、敵意など、人の心の中にある壁を取り除くことも急務です。」 黒柳徹子

● 参考文献

- ・ STOP THE WALL in PALESTINE Facts, Testimonies, Analysis and Call to Action PENGON 2003
- ・ 「パレスチナに建設中の隔離壁 Q&A」パレスチナ子どものキャンペーン 2003 年
- ・ 『パレスチナ農民が語る「隔離壁」が奪ったもの - フェイズ・タネブさん講演録 -』パレスチナの平和を考える会 編 2005 年
- ・ 『現地ルポ パレスチナの声、イスラエルの声』土井敏邦 岩波書店 2004 年

シオニズムについて

日本キリスト教協議会 幹事

真野玄範

●シオニズム批判と反ユダヤ主義

パレスチナ解放闘争では、「シオニズムは、軍事主義的な領土拡張主義であり、人種主義である。イスラエルが国家理念としてのシオニズムを放棄しない限り、中東に平和は実現しない」と主張されてきた。パレスチナの民衆と連帯する者たちは「我々が批判するのはシオニズムであって、反ユダヤ／反セム主義の立場をとっているのではない」と説明してきた。(註1)

それに対してイスラエルは、「シオニズムとは2000年来の帰郷への願いであり、イスラエル建国のビジョンである。シオニズムを否定する者は、反ユダヤ／反セム主義者であり、イスラエルの正当性を突き崩し、国際社会から締め出すことを目的としている」と主張し、「反シオニズムだが反ユダヤ主義ではないなどというのはまやかしかである」と批判する。シオニストがよく引用するのが、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の「反シオニズム主義者の友人への手紙」(1967)である。

「あなたは、ユダヤ人を憎んでいないと言います。ただ、シオニズムに反対しているだけなのだ、と。真実よ、

高い山の頂から神の緑の地球に響き渡れ！シオニズムを批判する者はユダヤ人を否定しているのです。それが神の真実です。(中略)反シオニズムとは何でしょう？それはユダヤ人の根本的な権利の否定です。私たちがアフリカの民のために主張し、世界の他の全ての国々が自由に享受している権利の否定なのです。友よ、それはユダヤ人に対する差別です。彼らがユダヤ人だからこそ受けている差別なのです。つまるところ、反シオニズムとは反セム主義なのです。」

筆者はジュネーブの世界YMCA同盟で働いていたとき、この「イスラエル／シオニズム批判は反ユダヤ主義だ」という論理に基づくキャンペーンをSWCなどに張られて組織が分解寸前まで追いつめられるのを内部で経験をした。(瀬戸際で救ってくださったのが、東エルサレムYMCAの理事長をされているリア主教であった。)

「反ユダヤ主義」のレッテルを貼られることの意味はなかなか日本では想像しにくいだが、欧米では致命的なものである。それは社会的な抹殺、財政的な圧迫、支援者・会員を失うことを意味し、妥協することで免れようとする者と立場を堅持しようとする者の間の深刻な分断を意味する。欧米諸国においてパレスチナ問題に関わることは、他の様々な国際問題に関わることは意味が全く異なる。中世・近代における経済・社会・国家の形成過程において作り出した、デ

リケートな未解決の差別問題、罪の意識と向き合わなければならないからである。そのため、イスラエルの人権侵害を批判するときには必ず対のようにしてパレスチナの「自爆テロ」を非難するというような、「中立性」と「バランス」に配慮した政治的言辭に終始することになる。ドイツのヴァイツゼッカー元大統領の有名な演説「荒野の40年」における中東への曖昧で無責任で小さな言及を見よ！(註2)

全く対照的なのが「南」の国々におけるパレスチナ問題の受け止め方である。それを実感したのが、2001年に南アフリカ共和国ダーバンで開かれた国連の第三回反人種差別国際会議(WCAR)においてであった。植民地支配と人種差別を経験した「南」の人々は、パレスチナ問題の本質を見抜き、それを口にすることを躊躇しない。「パレスチナに行ったことがあるが、我々が経験したアパルトヘイトよりも酷い」と、何人もの南アの人から証言を聞いた。今日、国家レベルではパレスチナと第三世界の国々の連帯は弱くなっているが、民衆レベルでは失われていない。

会議が終わってジュネーブに帰ると待っていたのが、「WCARは反ユダヤ主義者にハイジャックされた」とするキャンペーンであった。WCARでは移住労働者差別や日本の部落差別など広範に渡る諸問題が議論されたにも関わらず、そのキャンペーンによってNGO会議の成果が記された文書は丸ごと葬りさらされたような形になってしまった。WCARが反ユダヤ主義の声であふれかえていたというが、その声とはNGO会議に参加した「南」の人々



羊飼いの少年。Jayyous 近くで。写真：Paul Jeffrey /ACT

のシオニズム批判のことであり、国家間会議では前二回の反人種差別国際会議から大きく後退してイスラエルの人権侵害について取り上げない結果だったのである（*註3）。

このシオニズム批判=反ユダヤ／反セム主義だという強弁と、それによるイスラエル批判封じは、その主張の明らかな破綻にも関わらず、ほとんどが欧米人によって構成されている国際の場では通ってしまうのである。その後も、「反ユダヤ主義者によってハイジャックされた」というシオニストのキャンペーンは、世界社会フォーラムなど、様々な国際

会議や国際機関をめぐってエスカレートし続けている（*註4）。

ホロコーストの体験を伝えながら、一方でそのようなイスラエル擁護のキャンペーンに励むユダヤ系「人権」団体の活動を目にするたびに、アウシュヴィッツの証言者プリモ・レーヴィのことを思う。彼は1987年自宅マンションのエレベーターホールに投身自殺した。イスラエルが過去から何も学ばず、パレスチナ人の殺戮、抑圧を続けることに絶望し、ホロコーストの体験者として伝承することに限界を感じて自殺したのである。

※註1：「反ユダヤ主義（anti-Jewish）」は宗教的文化的集団としてのユダヤ人に対するものであるのに対して、「反セム主義（anti-Semitism）」は「人種」的集団としてのユダヤ人に対するものである。

※註2：「中東情勢についての判断を下す際には、ドイツ人がユダヤ人同胞にもたらした運命がイスラエルの建国の引き金になったこと、その際の諸条件が今日なおこの地域の人々の重荷となり、人々を危険に曝しているのだ、ということを考えて頂きたい。」（「荒野の40年」1985）

なお、ドイツは、1963年にはイスラエルとの国交樹立のために秘密軍事援助を行い、湾岸戦争の時には英米の戦費を負担しただけでなく、紛争地帯への武器供給を禁止してきた国是を崩してイスラエルに大量の武器供与を行った。

*註3：武者小路公秀さんもWCARについて以下のように報告されている。

「私の感じでは、ダーバンの会議でイスラエルのパレスチナに対する人種主義的な弾圧が全く取り上げてもらえなかったことが、イスラム社会、アラブ社会にかなり広がったのではないか、という気がしています。（中略）植民地支配と奴隷制の被害者に対し会議で謝罪が行われたということは、私はかなり重要なことだったと思います。しかし、それだけにイスラエルがパレスチナ民族に対して人種主義的な殺戮を含む弾圧をしていることは客観的に見て明らかなのに、EUがイスラエルに批判がましいことが言えないという悲しい制限の問題がありました。いわんや、米国に至っては話し合いさえも途中で辞めてしまう。ダーバンの会議が「パレスチナ人にハイジャックされた」と言って撤退した。これは最も乱暴な、ダーバンに対する責任回避の行動だったと思います。」

*註4：様々な人が証言している。

- 「世界社会フォーラムにおける反ユダヤ主義って？」（セシリー・スラスキー、2004年2月19日、ナブルス通信2005.2.1号）

「イスラエルのパレスチナ占領が生み出す胸の張り裂けるような現実を言及するだけで、イスラエルを地球上から抹殺するための陰険な計画があり、ユダヤ人の中にはそれに加担するものもいる、その証拠だということになってしまいます。さらに、ただ原因を示すことも偏向を証明することになっていきます。」

（セシリー・スラスキーは「平和を目指すユダヤ人の声」スタッフ）

- 「反ユダヤ主義についての決議採択を国連に迫る世界ユダヤ人会議のキャンペーンを分析する」（ローラ・リアンダ 2005年1月25日、ナブルス通信2005.3.6号）

「目新しいのはキャンペーンの熾烈さとそれが広範囲にわたっていることで、中傷の対象は政治問題を取り扱う機関にとどまらず、経済や社会、人道主義や法律を扱う機関まで広がっている。偏向の罵倒は国連開発計画や人道活動部にも向けられている。（…）もうひとつ目新しいのは、国連の原則をあえて堅持する国連の職員に対する個人攻撃が激しくなっていることだ。（…）これらの例が示すように反ユダヤ主義に関する心配は宗教や民族的な不寛容の問題から、イスラエル政府に対するどんな批評も許さない、そして最終的には、イスラエル対パレスチナの紛争への国際的なアプローチを治める基本原理をすら変えることを目論む全面的なキャンペーンに姿を変えてしまった。」

（ローラ・リアンダは元国連職員。反アパルトヘイト・センター、国連人権センター、パレスチナ権利局で勤務。）

●シオニズムは西欧近代的な政治運動であること

では、そもそもシオニズムとは何なのか。その基本的性格はどんなものなのか。

一般にシオニズムとは根拠を旧約聖書におくユダヤ教の宗教的運動であるかのように思われている。シオンの丘（エルサレム）に国家を再建することはディアスポラ（離散）以来の苦難を嘗めてきたユダヤ教徒の悲願であり、イスラエルはその成就である、イスラエル人はそのように理解していると思われる。しかしこれは、当のユダヤ人の歴史を無視した誤った観念に過ぎない。

近代シオニズム運動の父と呼ばれるテオドール・ヘルツェルはユダヤ教にもユダヤの文化的独自性にも関心がなく、むしろそれらを積極的に否定する同化主義者だった。彼は国家建設の地としてキプロス島、ウガンダなどを検討した。

イスラエル建国にいたるシオニズム運動は、ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害を受けて始まった。重商主義による資本経済発展と啓蒙主義の広まりの中でユダヤ人の個人・市民としての解放は進んでいたが、一方で国民の同質性を原理とする近代「国民国家」形成が進み、国民＝「単一の民族」とするナショナリズムが高まって、1870年代後半頃から、完全に同化されえない「民族」集団として、さらには特異な「人種」集団としてユダヤ人が迫害されるようになった（「ユダヤ人問題」）。そこで、アイデンティティを守るため、あるいは生き残るための方法論として、ユダヤ人の間でシオニズムが議論され始めた。

ロシアや東欧では、1881年以降に頻発したポグロム（集団虐殺）や反ユダヤ立法の動きの中で、信仰の崩壊を防いでユダヤ教徒の一致を守ることを目的とした「精神的シオニズム」が生まれた。彼らはパレスチナの植民地化を要求したが、国家建

設は神への冒瀆であるとして反対した。また、2、3の入植地に移住して離散ユダヤ民族のルネサンスを生む拠点作りを訴える「文化的シオニズム」も生まれた。彼らはパレスチナの植民地化、国家建設に反対し、アラブ人との共存を考えていた。

西欧では、フランスで起きたドレヒュス事件(1894-1906)が「政治的シオニズム」を生んだ。記者として事件取材したウィーン市民テオドール・ヘルツェルは同化主義の限界を見て、『ユダヤ人国家』を著し、ユダヤ「民族(Nation、国民)」国家の建設を外交交渉による認可獲得によって実現しようとする政治的シオニズムを起こした。(ここで言う民族とは西欧近代の政治概念であって、聖書で使われる「民族」との種差に留意すべきである。)彼の考えは新しいものではなかったが、国家建設に向けた提言が具体的であり、出版から一年半後の1897年8月には第一回シオニスト会議開催を実現した。この会議でヘルツェルを議長とする「シオニスト機構(後に“世界シオニスト機構”と改称)」が設立され、以後の運動の中心を担うこととなった。東欧の精神的シオニストとの間では建設の地をめぐる対立が続いたが、ヘルツェルの突然の死(1904)で運動は分解を免れ、精神的シオニストの主張が通って建国の地はパレスチナに求められることになった。

東欧のシオニズムは、メシア到来運動の挫折を経て、ベングリオンなどの社会主義シオニストが主導する「実践的シオニズム」が主流となった。移民や入植地開拓・防衛のために非合法手段も辞さず、既成事実を積むことによる国作りを進め、パレスチナを委任統治していたイギリスへの圧力をかけていった。そのための組織が、1920年にベングリオンらによって設立されたヒスタドルト(ユダヤ労働総同盟)とハガナ(ユダヤ防衛組織)である。労働総同盟は、単なる組合ではなく、入植地建設の諸事業を行う企業体であり、建国前に政府のような役割を果たし

た。これに由来するシオニズムが後にイスラエルで主流の潮流となる。ハガナは後にイスラエル国軍の中核となった。一方で、ベングリオンらの社会主義的理想の建前と現実の矛盾をつき、民族主義〜大イスラエル主義を強硬に主張してテロリズムを必要悪として積極的に用いる「シオニスト修正派」や、「イルグン」「シュテルン」などの組織も生まれていった。

実践的シオニズムと政治的シオニズムは1907年に統合されて「総合的シオニズム」となった。総合的シオニズムを主唱したハイム・ワイツマンは、第一次世界大戦でのイギリスへの協力と引き替えに「バルフォア宣言」(1917)を引き出し、1935年にユダヤ機関の委員長を継いだベングリオンと共に、庇護者を英国から米国に移しながら、国連による分割案(1947)を引き出して、イスラエル建国(1948)を果たした。

ところで、第二次世界大戦とショアー(ホロコースト)を経るまでは、大多数の正統派ユダヤ教徒、改革派ユダヤ教徒はシオニズムを否定していた。世俗的なユダヤ人にも関心を持たれなかった。反ユダヤ主義の圧力を感じながらも、大半のユダヤ人には見も知らぬ「荒野」に移民することは考えられず、それぞれが住む国の国民として生きようとしていたのである。シオニストにとってそのような同化主義は運動の重大な障壁であった。そのため、しばしば反ユダヤ主義者と結ぶことにもなった。テオドール・ヘルツェルは、ロシアからユダヤ人問題を除くと約束し、ユダヤ排斥主義者の助けを借りようとした。第二次世界大戦前夜、シオニストの地下組織イルグンは、ポーランドのユダヤ排斥主義者の庇護の元で軍事訓練基地を設け

ていた。そして世界シオニスト機構はナチス・ドイツと「ハーヴェラ協定」(1933)を結んで、世界のユダヤ人の大多数の反対にもかかわらず、第二次世界大戦末期まで公然と協力関係を持っていた(*註5)。今日、「ユダヤ人はキリスト教に改宗するか、ハルマゲドンで殺されるしかない」と信じるキリスト教シオニストとイスラエルが親密な協力関係を結んでいるのは、決して不思議ではないのである。反ユダヤ主義とシオニズムは、民族分離主義において利害が一致しているからである。

以上の素描で確認したいのは、宗教的運動でなく、分離主義的で国家主義的な民族主義や社会主義の政治運動としてのシオニズムが、欧米列強の覇権主義に乗ることで、イスラエルを建国したという事実である。

「シオニズムとは自分の土地に帰って住みたいというユダヤの民の夢、理想以外の何ものでもない」(前出の手紙)というキング牧師の認識は、シオニズム運動の初期であれば必ずしも誤りとは言えなかったかもしれない。そのような素朴な「夢、理想」をもって運動に参加していた人々もいたことだろう。アハド・ハアム、マルチン・ブーバーなどの、人間主義的な思想家もいた。米国で徹底したシオニズム批判を続けているノーム・チョムスキー(ユダヤ系アメリカ人)も10代の頃はシオニストであったという。しかし、現実には展開したシオニズムは、政治運動として、様々な差異を持ったシオニズムを呑み込みつつ、自ら帝国主義



アーモンドの殻を剥く。西岸の小さな村 Aboud で。写真：Paul Jeffrey /ACT



西岸の村 Aboud のギリシア正教会の信徒 写真：Paul Jeffrey /ACT

の尖兵となることで西欧諸国、資本家の支持を取り付け、実現していった。テオドール・ヘルツェルは、武力でアドリア海を制圧した植民地主義国家、7世紀末のベネチア共和国の建国史がモデルだと日記に記している（ベネチアこそは後にヨーロッパで最初のゲットーを作ったのだが！）。そして『ユダヤ人国家』では、「そこ（パレスチナ）において我々は、アジアに対峙するヨーロッパの壁となるのだ。野蛮に対峙する文明の前哨基地として奉仕するのだ」と書いている。キング牧師の認識にあったものは根本的に異質な思想であることは明らかであろう。それは現代において、米国がアジア諸国で展開している「対テロ戦争」にまで続く西欧帝国主義と同質の思想なのである。

なお、冒頭に述べたようなシオニズムの観念を広めている宗教的シオニズム～政治と宗教を不可分に捉える原理主義は、第二次世界大戦とイスラエル建国を経て初めて広まりはじめ、1967年の六日戦争を転機としてシャロンに代表されるような軍事主義的（世俗的）シオニズムと結びつくことで初めて影響力を持ち始めた潮流である（ガッシュ・エムニム（Gush Emunim）を中心とする）。米国でキリスト教シオニズムが急速に広まりはじめ、イスラエルとの同盟関係が結ばれたのも、六日戦争を転機とした。（*註6）

今日のイスラエル政府のシオニズムとは、反アラブ・領土拡張主義・

系イスラエル市民に対して過酷な差別を強いていること、財産を没収するシステムを持っていること。占領を続けるパレスチナ自治区で、パレスチナ人居住地域を入植者専用道路や「壁」で囲み、ゲットー化し、その出入りを一方的にコントロールしていること。ある地域を軍事地帯だと宣言して住民を全て追い出し、その後安全地区を宣言して入植地を作るといったことを繰り返してきたこと。…こうした「人種・宗教・生まれ」（イスラエル政府とユダヤ民族基金の間の契約に書かれている文句）によって差別し、軍事的手段に訴えて強制する具体的な諸施策が体现している国家理念が、パレスチナ解放闘争において批判されているシオニズムなのである。

*註5：「ユダヤ人を、シオニストと同化主義者の集団の2つのカテゴリーに分けるべきである。シオニストは率直に人種主義の信念を表明し、パレスチナへの移民による独自のユダヤ人国家建設計画を推進している。…われわれの正しい願望と、優れた公式命令には、彼らと共通するものがある。」（ナチス・SS保安部長ラインハルト・ハイドリヒ、1935）

*註6：宗教的シオニズム（原理主義）について参照した文献

- "The Militarist and Messianic Ideologies", 2004, Neve Gordon (Ben Gurion Univ.)

- "A Historical Look at Religious Zionism", 1995, Dan Michman (Bar-Ilan Univ.)

- "The impact of Christian Zionism on the Arab-Israeli conflict", 2005, Norton Mezvinsky (Central Connecticut State Univ.)

強硬路線の政治的立場を意味するものとなっている。例えば、婚姻法、移民法、土地法などによって、職業において、非ユダヤ

●シオニズムはユダヤ思想に由来せず、帝国主義から発想されたこと

シオニズムがユダヤ民衆の参加する運動として展開し始めたのは19世紀末以降のことだが、シオニズム自体はそれに先だって非ユダヤ人によって用意されていたことを最後に押さえておきたい。

シオニズムはユダヤ思想に由来するものではない。シオニズムは、宗教的には神への冒瀆・異端として[正統派ユダヤ教]、またユダヤ教とは異質な世俗主義であるとして（ユダヤ人とは「民族」ではなく宗教集団であるから、国家を作るというプロジェクトはナンセンスである）[改革派ユダヤ教]、政治的にはフランス革命とナポレオン戦争によって進んでいた法的な解放を脅かし、同化の努力を台無しにして反ユダヤ主義を誘発する危険思想として、長い間ユダヤ人には受け入れられることがなかった。

今日、シオニズムの起源は、シオニストによって神話化され、非ユダヤ起源であることが忘却の彼方に押しやられている。一般にシオニズムはテオドール・ヘルツェルの『ユダヤ人国家』（1896）をもって創始されたとされ、あるいはモーゼス・ヘスの『ローマとエルサレム』（1860）やレオン・ピンズカーの『自力解放』（1862）が端緒であるとされている。最も遡っても、スファルディームのイエフダー・アルカライ（Yehuda Alkalay, 1843）が先駆者として挙げられる程度である。

しかし、これらはいずれもシオニズムのユダヤ化を画したものであって、シオニズム自体は、西欧諸国で「東方問題」と「ユダヤ人問題」を解決する政策論として、プロテスタンティズムから生まれた一つの思潮～キリスト教シオニズムと表裏一体となって、形成されたものだった。

「ユダヤ人問題」については前節で述べた。「東方問題」とは崩壊しつつあったオットーマン帝国と立ち現れつつあったアラブ世界の、西欧

列強による獲得競争のことである。

イギリスにとってはオットーマン帝国は、最重要な植民地であるインドと連携するための生命線であり、また資本と技術を投入して植民地化すれば富をもたらすはずの地であった。逆に、ロシア、フランスにとっては、イギリスの覇権を破って自らの帝国を拡張する上で、オットーマン帝国を崩し、支配することが鍵であった。ここにおいて、パレスチナは、オットーマン帝国とアラブ世界の中心にあったために、重大な政治的な意味を持ち始めた。そこで、パレスチナに、尖兵として、楔として、ユダヤ人国家を作ることが発想されたのである。それは同時に、ヨーロッパのユダヤ財閥の富と世界的商業ネットワークを握るための画策ともなった。

まず実践に移したのはフランスであった。ナポレオンはエジプト・パレスチナの遠征を行い(1798-99)、「エルサレムを、フランスによる保証と保護と共に、正統なる継承者であるあなた方に与えよう」(1799)という宣言を用意した(*註7)。そしてヨーロッパ中からユダヤ人代表者を集めて「大サンヘドリン」(古代ユダヤ人議会の名称)の名のもとに会議を開かせ(1807)、法的解放、ユダヤ国家建設と引き替えに、対ロシアの戦争、対イギリスの貿易拒否に協力させようとしたのである。しかし、法的解放は歓迎されたが、パレスチナにユダヤ国家を作る提案は拒否された。それどころか、「ユダヤ教徒はもはや"民族体(corporate nation)"を構成するものではない」と宣言されてしまったのである。しかし、ナポレオンが招集した大サンヘドリンは、レオン・ピンスカーのユダヤ民族会議、ユダヤ民族機関のアイディア(1882)に始まり、現在の世界ユダヤ人会議、世界シオニスト機構などに至る国際的ユダヤ人組織の先駆を為すものとなった。

このフランスのシオニズムの流れは、その後も、特にナポレオン三世(1848-70)の下で継続した。ナポ

レオン三世の私設秘書であったカトリックのアーネスト・ラーランヌは『東方についての新しい問題：ユダヤ国家の再建』というアピールを発表した(1860)。これに影響を受けてモーゼス・ヘスは『ローマとエルサレム』(1862)を書いたのだった。ヘスは「インドと中国に続く道がフランスの大義に忠実な民(ユダヤ人)によって植民されることは、フランスの利益になることである」と、フランス植民地主義に忠実であるようユダヤ人に呼びかけたのである。

イギリスはナポレオンの発想と失敗に学んで、より手の込んだ構想を立て、実行に移した。パレスチナへのユダヤ人入植に重点をおき、そのためのユダヤ人「帰郷」の合意を、トルコのサルタンから(1838)、プロテスタント諸国から(1840)、取り付ける努力を払い、またオットーマン帝国の正教徒に庇護を与えるロシア、カトリックに庇護を与えるフランスに対抗して、(プロテスタントはいないので)ユダヤ人に庇護を与え、そのためにエルサレムに副領事を置き(1838)、イギリス国教会(聖公会)の主教が送り込まれた(1841)。

しかし、イギリスのユダヤ人もシオニズムを支持しなかった。イギリスの駐シリア領事チャーلز・ヘンリー・チャーチルは、ユダヤ人自身がシオニズムのイニシアティブをとることが必須であるとしてロンドン・ユダヤ人評議会に呼びかけたが(1841)、支援はするが、旗振り役にはならないと拒否されたのである。

帝国の政策としてのシオニズムがユダヤ人に受け入れられないのを見て、シャフツベリー伯爵が1809年に設立した「ユダヤ人の間にキリスト教を広める会」は、ロシアや東欧のユダヤ人に注目し、シオニズムのユダヤ化、ユダヤ人のシオニスト化に着手する。この会の働きによって、1841年、改宗ユダヤ人であったマイケル・ソロモン・アレキサンダー主教がエルサレムに派遣されて

いる。シャフツベリー伯爵は、全てのユダヤ人がパレスチナに移住し、ユダヤ国家が再建されることが神の計画であり、それがキリスト再臨の条件となると考える、キリスト教シオニストであった。彼はユダヤ人の同化(イギリス国民化)に強く反対し、シオニズムは植民地化の最も安上がりで早い方法論だと主張して、縁戚関係にあった外相パーマーストンを動かし、一連の中東政策の実現に大きな影響を揮った。ここで、シオニズムは、宗教的願望と現実の政治が不可分に結びついたイデオロギーになり始めたのである。

チャーチルの失敗の後に任命されたのが、南オーストラリアで植民地統治の経験を積んだジョージ・ゴラーであった。イギリスはアイルランドの小作農、ウェールズの鉱山労働者、イングランドの農夫などを大量にオーストラリアに送りながら、一方で東欧の貧しいユダヤ人をイギリスに移住させた。パレスチナに入植させるためである。この中からシオニズム修正派の指導者ウラジミール・ヤボチンスキーが生まれている。前節で述べた実践的シオニズムによる東欧からのパレスチナ移民も、資金はイギリスのユダヤ財閥ロスチャイルド家が出していたのである。

ゴラーは植民地化成功の鍵として入植者の意志への配慮が重要であるとし、ユダヤ人を罵りながらパレスチナへの入植を強制することはできないと強調した。また「パレスチナはその九割は人の住まない土地であり、文明化された入植者を待っている！」と宣伝し、「パレスチナと東方世界をユダヤ人によって文明化する計画」を細部に渡って練って実行したのだった。イギリスの非ユダヤ人作家のジョージ・エリオットは『ダニエル・デロンダ』(1876)で、それまでのユダヤ人のイメージを覆し、現実には未だ存在しない英雄的なユダヤ人愛国者＝シオニストの姿を描き出した。「いにしえのごとく、壮大で質実かつ公正なユダヤ新国家、東洋の専制主義の只中で、古



写真：Paul Jeffrey /ACT

パレスチナの民家の破壊阻止のために、世界中から集まった青年が泊まり込んでいるところ。その後、2003年8月18日に破壊された。

代ユダヤ社会のひたいに星のように輝いていた平等さ、西欧の輝かしい自由をも凌ぐ平等さによって、国民が保護される共和国」を作る知恵を“我々(ユダヤ人)”は持っていると言ひ、大きな影響を与えた。

前節で引用したテオドール・ヘルツェルの言葉はゴーラーやエリオッ

トの言葉の引き写しであることが分かるだろう。ヘルツェルはイギリスの帝国主義・キリスト教シオニストが用意した「フィクション」を、実現しようとしたのであった。

シャフツベリー伯爵に深く影響を受けた人に、ウィリアム・ヘクラ(1845-1931)、デイヴィッド・ロイド・ジョージ(1863-1945)、アーサー・バルフォア(1848-1930)がいる。ヘクラは駐ウィーン英国大使館付き聖公会司祭だったときにテオドール・ヘルツェルと知り合い、ヘルツェルをイギリス政府関係者と結びつけた。そして、第一次世界大戦中、英国首相デイヴィッド・ロイド・ジョージと、外相アーサー・バルフォアが、「バルフォア宣言」によって、政治的シオニズムの後押しをしたのであった。

* 註7: "Letter to the Jewish Nation from the French Commander-in-Chief Buonaparte" 1799、※ "Napoleon's Proclamation of a Jewish State" として知られる。

*註：参考文献

- "The Non-Jewish Origin of Zionism" Mohameden Ould-Mey (Indiana State Univ.), 2002, The Arab World Geographer 5(1):34-52.) ※この節は主にこの論文を参照してまとめた。

- "Bible and Sword: England and Palestine from the Bronze Age to Balfour" (Barbara Tuchman, 1984, Ballantine Books)

*註：紙幅の都合で書けなかったが、プロテスタンティズムとキリスト教シオニズムについては、Ould-Meyの論文の他、以下が参考になる。

- Frederic W. Bushの諸論文 ("Christian Zionism" など)

- Stephen Sizerの諸論文 www.christchurch-virginiawater.co.uk

WCC-EAPPI

パレスチナ・イスラエルにおけるエキュメニカル同伴プログラム 非暴力抵抗によって占領に終止符を

●共にあることによって

「パレスチナ・イスラエルにおけるエキュメニカル同伴プログラム (EAPPI: Ecumenical Accompaniment Programme in Palestine and Israel)」は、世界教会協議会 (WCC) のイニシアティブで2002年8月に始まりました。“エキュメニカル同伴者” (EAPPIの参加者) は、人権と国際人道法の侵害に関して監視し、パレスチナ人キリスト教徒・イスラム教徒およびイスラエル人平和活動家の非暴力抵抗運動を支援し、同伴することによって守り、また占領に反対して諸教会と共に国際社会に提言活動を行います。以下のようなことを目標としています。

- ・ 占領の暴力を明るみに出すこと。
- ・ 市民に対する残忍な行為、屈辱を与える行為、暴力をやめさせること。
- ・ より強固なグローバルなアドボカシーのためのネットワークを作ること。
- ・ 人権と国際人道法が守られるようにすること。
- ・ 参加者がそれぞれの出身国において、世論を動かし、パレスチナ占領をやめさせ、パレスチナの国家を実現するため、中東に関する外交政策を変えていくこと。
- ・ パレスチナ人とイスラエル人平和活動家に連帯を表し、パレスチナの人々と教会を力づけること。
- ・ 正義と平和を求める非暴力抵抗運動によって不法なパレスチナ占領をやめさせることが可能であると実地に証していくこと。

●あなたも参加しませんか？

これまでに12ヶ国、30の教会から23歳～75歳の198人が参加しました。2005年4月末の時点で22人が働いています。(カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、アイルランド、ニュージーランド、ノルウェイ、南アフリカ、スウェーデン、スイス、イギリス、アメリカ合衆国)

アジアの同胞として、アジアからの参加者が出ていないことはとても残念なことです。日本キリスト教協議会・国際関係委員会では、希望者がいれば派遣したいと考えています。参加の条件は、最低3ヶ月間参加できること、25歳以上であること(場合によっては23歳以上、他にグループでの短期間の参加も応相談)で、面談の上で、決定いたします。費用は補助いたします。

参考文献

■「パレスチナ問題」

- 『パレスチナから報告します』 アミラ・ハス / くぼたのぞみ訳、筑摩書房 ※イスラエルの新聞記者の書いた記事を集めたもの
『イスラーム誤認』 板垣雄三、岩波書店
『パレスチナ (新版)』 広河隆一、岩波新書 ※定番
『パレスチナ』 芝生瑞和、文春新書
『聖地エルサレム』 平山健太郎、NHK 出版
『対テロ戦争とイスラム社会』 板垣雄三編、岩波新書
『パレスチナの声、イスラエルの声』 土井敏那、岩波書店
『写真記録「パレスチナ」』 ①②広河隆一、日本図書センター ※大部ですが、資料価値は高い
『パレスチナ人の歴史』 D.ギルモア / 北村文夫訳、新評論 ※20年前のもですが、歴史を知る上では重要
『揺れるユダヤ人国家』 立山良司、文春新書
『パレスチナ「自爆テロの正義」』 Q サカマキ、小学館文庫
『パレスチナ問題』 エドワード・サイード / 杉田英明訳、みすず書房 ※古典ですが、翻訳は最近。
『イスラエル兵役拒否者からの手紙』 ベレツ・キドロン / 田中好子訳、NHK 出版、2003 年
『ヨルダン川西岸 アラブ人とユダヤ人』 デイヴィッド・グロスマン / 千本健一郎訳、晶文社、1992 年
『ペンと剣』 エドワード・サイード / 中野真紀子訳、クレイン、1998 年
『蘇るパレスチナ』 藤田進、東京大学出版会、1989 年
『インティファダ・石の革命』 パレスチナ蜂起統一民族指導部編 / 同書刊行委員会訳、第三書館、1993 年
『「和平合意」とパレスチナ』 土井敏那、朝日新聞社、1995 年

■「ユダヤ人問題」

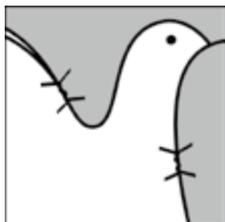
- 『見えざるユダヤ人』 白杵陽、平凡社、1998 年
『ユダヤ人はなぜ殺されたか』 L.S.ダビドビッチ / 大谷訳、サイマル出版会
『ユダヤ人とは何か (I)』、広河隆一編、三友社出版
『ユダヤ人問題の史的展開』 アブラム・レオン / 湯浅訳、柘植書房
『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』 W.ラカー、第三書館

■イスラエルの中のアラブ人

- 『イスラエルに生きる人々』 アモス・オズ / 千本健一郎訳、晶文社、1985 年
『リッダ アラブ人としてイスラエルに生きる』 ファウジ・エル・アスマール / 城川桂子訳、第三書館、1981 年
『イスラエルのなかのアラブ人』 サブリ・ジュリス / 奈良本他訳、サイマル出版会

■パレスチナとキリスト教

- 『聖戦の歴史』 K.アームストロング、柏書房
『アラブが見た十字軍』 A.マアルーフ / 牟田口他訳、リプロポート
『パレスチナとキリスト教 '90』 日本キリスト教団社会委員会編
『パレスチナとキリスト教 '92』 日本キリスト教団社会委員会編
『中東キリスト教史』 中東教会協議会編、日本基督教団出版
『私はパレスチナ人クリスチャン』 ミトリ・ラヘブ / 山森訳、日本基督教団出版局
『アラブ人でもなくイスラエル人でもなく』 R.アサー / 輿石訳、聖公会出版



2004年9月23日パレスチナ交流集会 参加団体の紹介

※ 協賛団体から出していただいたアンケートをもとにしています。

■ 特定非営利活動法人 アーユス仏教国際協力ネットワーク

代表者：茂田真澄
連絡先：〒135-0024 東京都江東区清澄 3-4-22
Tel.03-3820-5831, Fax.03-3820-5832
mika@ayus.org (担当：枝木美香)
パレスチナでのパートナー団体：
パレスチナ子どものキャンペーン
日本国際ボランティアセンター

活動の沿革・概要： アーユスは、仏教僧侶が宗派を超えて集ま

り、1993年に発足した国際協力NGOです。

私たち一人一人のいのちや生き方が、世界の様々な事象や問題と結びついているという縁起の法を基本理念とし、平和と人権のための様々な活動に取り組んでいます。

その中でもパレスチナ問題には設立当初から深い関心を抱き、現地で活動しているNGOを支援

し連携をとることで、情報発信、キャンペーン活動をおこなっています。宗教戦争と捉えられがちなパレスチナ問題ですが、実際は占領や土地の搾取を含む人権侵害を問うべきだと考えます。宗教が紛争の理由に使われているのであれば、尚更、宗教者のグループとして、パレスチナの現状と根本原因なのかをしっかりと知る必要があると認識しています。

■ アハリー・アラブ病院を支える会

代表：村山盛忠 藤田進
連絡先：東京都新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教団社会委員気付
Tel.03-3202-0544, Fax.03-3207-3918
<http://www.geocities.jp/hpyuko/>
アハリー・アラブ病院への支援金送り先：
郵便振替 口座番号 00150-7-601525
名義 アハリー・アラブ病院を支える会

活動の沿革・概要： アハリー・アラブ病院は1882年、教会宣教師協会によって、ガザ市の中心に建てられ、1982年に、エルサレム管区の奉仕事業の拠点となりました。第1次インテファダの間には、コミュニティと協力してガザでパレスチナ人によって運営された唯一の非イスラエル系病院でした。これは、聖公会の宣教の例証であり、日常生活におけるコミュニティへの関心の目に見えるかたちでの表明です。ガザ地区の140万人の住人のうちキリスト教徒は2,500人以下ですが、ア

ハリー病院はガザのすべての人に最も質の高いヘルスケアを提供しているとして尊敬を受けています。その活動の相当な部分は慈善事業で、住民の60%以上が難民キャンプに暮らすコミュニティにあって、最も貧しい人々に仕えています。内科・外科全般のケアの提供および、病気や障害の予防に関し、難民を含めて、人種、ジェンダー、民族や政治的關係にかかわらず、ガザ地区すべての人々にとって大きな役割を果たしています。

近年、アハリー病院は、とりわけパレスチナ-イスラエル間抗争にまつわる危機の時期に、人々の求めに応じてきました。救急プログラムを通じて、危機の犠牲者たちに、医療的処置を提供し続けています。傷の手当てをし、けが人を医療機関に運ぶために、救急チームは激しい爆撃を受けている所にも向かいます。生活の基礎

的な必需品すら十分でない女性や子ども、高齢者などの弱者向けのサービスも行っています。病院は、それらがもっとも必要とされる地域に、コミュニティ出張クリニックを組織する事業にも携わっています。いかなる形でも健康に関するサービスを受けられない村や人々に、基本的なケアや在宅ケアを提供するためです。

私たちは、「湾岸戦争」後の緊急の取り組みとしてアハリー・アラブ病院への支援募金を始めてきました。この支援活動を通じて、日本の民衆とパレスチナ人との直接的な連帯のパイプ作りをはかりたいと考え、同病院から送られてくる報告を手がかりに被占領地パレスチナ人の様子を伝えるためのニューズレターも不定期に発行しております。

■社団法人アムネスティ・インターナショナル日本

代表者：川上園子

連絡先：東京事務所 〒101-0048
千代田区神田司町 2-7 小笠原ビル 7F
Tel.03-3518-6777, Fax.03-3518-6778
大阪事務所 〒552-0021 大阪市港区
築港 2-8-24 piaNPO 509
Tel.06-4395-1313, Fax.06-4395-1314

活動の沿革・概要： アムネスティとは英語で「恩赦」という意味。1961年の設立以来、世界人権宣言で謳われている基本的な人権をすべての人が享受できる世界をめざし、国境を超えて声をあげ続け

ている不偏不党の国際的な人権擁護団体です。現在、150以上の国・地域に150万以上の会員を持ち、国連など国際機関との協議資格を持っています。

アムネスティの調査と活動は、拷問や死刑、思想・信条など表現の自由への迫害、差別などを防ぎ終止符を打つために行なわれています。その調査の正確さには定評があり、多くの政府、メディア、学者に参照されています。

イスラエルおよびその占領地域についても、イスラエル軍による

移動の制限や治療の妨害などの集団的懲罰、民間人への違法な殺害、無差別な家屋の破壊、分離壁などについて数多くの報告書を発表し、一般市民の保護と公正な加害者処罰をイスラエル政府と国際社会に訴えています。

現在、「ストップ！女性への暴力」キャンペーンを国際的に行ない、とりわけ紛争下における女性への暴力の根絶を求めています。

アムネスティ日本は1970年に設立され、現在、約120のグループと約6000人の会員がいます。

■日本キリスト教婦人矯風会

代表者：佐竹順子

連絡先：〒169-0073 東京都新宿区百人町 2-23-5
Tel.03-3361-0934, Fax.03-3368-7374
パレスチナでのパートナー団体：
イスラエルの外務省パレスチナ担当（日本の外務省をとおして国連NGO婦人委員会が受け入れている矯風会はこの委員会に加盟している。）

活動の沿革・概要： 1886年12月、在京の56人のキリスト女性によって発足。現存する女性団体としては最も長い歴史をもつ。機

関紙を発行し、一夫一婦請願や、からゆきさん引き上げ請願を毎年つづけ、1894年には引き上げに備えて土地を購入し、慈愛寮の活動を始めた。

「福祉と運動は車の両輪」とのことばのもと、支部では福祉活動も起こり、公娼制度廃止、婦人参政権運動など女性の基本的人権のためのたたかい、一方で未成年者飲酒禁止、喫煙禁止の成立に努力。戦前平和を唱えながら戦争を阻止しえなかったことを反省し、戦後は平和運動にも力を注ぐ。性・人

権部、平和部、酒・たばこの害防止部を中心に国際協力部、信教の自由部、法律部、青年部、児童・教育部、宗教部、厚生部がある。

また下記の女性のための2施設を持ちこの種の働きとしては日本での先駆けとなっている。

女性の家HELP：緊急避難センター、相談
矯風会ステップハウス：生活の建て直し

■サラーム・パレスチナ

代表者：司祭 神崎雄二

連絡先：105-0011 東京都港区芝公園3-6-18 日本聖公会東京教区事務所気付サラームパレスチナ
Tel. 03-3433-0987

パレスチナでのパートナー団体：
エルサレム中東聖公会・エルサレム教区

活動の沿革・概要： 日本聖公会東京教区主教と随行員が、2004年2月にエルサレム教区を訪問したのを契機とし、交流と平和への取り組みを継続するために発足した。

現在の活動は、毎月一度の例会を持ち、パレスチナに関する学習、情報のわかちあい、各地の学習会

での発表・報告等を行っている。

またパレスチナからの来訪者の受け入れ実務を担当したり、今後、各層の訪問団の準備、組織化を行う予定。

また、日本におけるパレスチナ関係のエキュメニカル・NGO活動団体とも連帯し、共同行動を取れるよう努力したい。

■聖公会出版

連絡先：〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-5
Tel.03-3235-5681, Fax.03-3235-5682
nssk-bookshop@company.email.ne.jp

活動の沿革・概要： 有限会社聖公会出版は1976年の創立以来、聖公会に連なる皆様をはじめとし、教派を越えた多くの皆様に、書籍、新聞を提供して参りました。聖公会出版の中には、出版、新聞、書店の3部門があります。

1) 出版部門では、神学書、聖書注解、霊性など幅広いジャンルにわたるキリスト教書を出版しております。特記すべき事項は、2004年5月に、98年より聖公会エルサレム教区主教に就任されたリア・アブ・エル＝アサール主教の著書、「アラブ人でもなくイスラエル人でもなく——平和の架け橋となったパレスチナ牧師」を奥石勇司祭の翻訳によって刊行したことです。

2) 新聞部門では、聖公会にとらわれず、広くキリスト教界の動向をお知らせすべく情報収集を行い、毎月30000万部の新聞を発行し、購読者の皆様にお届けしております。3) 書店部門では、祈祷書、聖歌集をはじめとする多岐にわたるジャンルの書籍を、聖職者、信徒、神学生の皆様に、また聖公会に連なる教会、学校、病院、幼稚園などにお届けしております。

■占領に反対する芸術家たち (AAO)

代表：針生一郎
連絡先：八楯瑞子 (日本) /
サーミア・ハラビー (アメリカ)
Yakuwa: miz@air.linkclub.or.jp /
Samia Halaby: halaby@verizon.net
パレスチナでのパートナー団体：
パレスチナアーティストを含む国際組織
アルワーシティ・アート・センター
ハリール・サカーキーニー文化センター
他、企画による

活動の沿革・概要： 「占領に反対する芸術家たち」(Artists Against Occupation) は、2001年10月、東京で開催された八楯瑞子の個展、「パレスチナ・パレ

スチナ」のカタログで、世界の芸術家に呼びかけられ、設立された国際組織である。第1回展として開催された「パレスチナ・パレスチナ」以来、この呼びかけに呼応して、2002年8月にカナダ、オンタリオ州、ロンドンで第2回展、2003年5月にアメリカ、フィラデルフィアで第3回展、同年9月にカナダ、モントリオールで第4回展、2004年3月、再び東京で第5回展が開催され、イギリス、ロンドン展、フランス、パリ展が計画中である。

1983年、パリで第1回展が開催され、その後世界を巡回した「ア

パルトヘイトに反対する芸術」展をモデルとしている。

目指されるべきはイスラエルによる占領の終結である。イスラエルが国際法を遵守し、国連決議を受け入れるなら、そしてイスラエルに居住するパレスチナ人もまた、イスラエル人としてユダヤ人と同様の権利を有すると理解するだけで、これは容易に解決される問題なのだ。

■日本キリスト教協議会 (NCC-J)

代表者：総幹事 山本俊正
連絡先：新宿区西早稲田
2-3-18-24 (担当) 真野玄範,
Tel.03-3203-0372
E-mail: ncc-j@jca.apc.org
http://www.jca.apc.org/ncc-j/
パレスチナでのパートナー団体：
中東教会協議会、ACT International、
およびその現地メンバー教会・団体

活動の沿革・概要： 日本キリスト教協議会 (NCC) は、日本のプロテスタント諸教会、団体が、共に宣教・奉仕の課題を担うために作っている団体です。

世界教会協議会 (WCC) のメンバーとして、世界の諸教会とともに、「わかちあい募金」による人道支援や教育援助、WCCの

ドボカシー・プログラムへの参加を通してパレスチナ/イスラエル問題に取り組んでいます。国内では Stop the Wall キャンペーン実行委員会メンバーとして活動しています。またパレスチナ問題に関わるエキュメニカルなフォーラムを年に数度開催しています。

■日本YMCA同盟

代表者：総主事 山田公平
連絡先：〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
Tel.03-5367-6640, Fax.03-5367-6641
E-mail: info@ymcajapan.org
パレスチナでのパートナー団体：
ヨルダンYMCA, パレスチナYWCA
東エルサレムYMCA

活動の沿革・概要： アンマン市内のパレスチナ難民青年のための職業訓練センターの運営に対し、ヨルダンYMCAは財政・物資・人的支援を提供している。女性向けには美容や刺繍、パソコンなどの訓練もあり、託児施設もある。

2003年からは新たに女性障害者リハビリテーションセンター支援協力を開始している。日本YMCAはこれらの支援活動の運営資金を援助している。また、難民孤児サマーキャンプも行われ、日本から青年リーダーの派遣を行っている。2004年度は3名を派遣した。

東エルサレムYMCA本館は観光客激減の為、2001年2月に収入源だったホテルを閉鎖に追い込まれた。ベツァアホール旧会館もイスラエル軍に砲撃され会館損傷を受けた。東エルサレム本館もジェリコの職業訓練センター(VTC)も財政危機にあり、緊急

支援が必要である。ベツァアホールには昨年7月にスポーツセンター新館がオープンし、青少年や障害者が集っている。ジェリコのVTCでは現在男女240名の学生が2年間の訓練中であり、学生達は遠くジェニン、ナブルスなど北部からも集まってきていて寄宿舎で生活をしている。女子学生は、電気機器修繕・コンピューターグラフィック技能の習得、男子学生は自動車整備・塗装・家具作り・機械工技能等の習得により就業を目指している。日本YMCAは2004年度よりこれらの活動の運営資金の援助を開始した。

■日本YWCA

代表者：会長 青木恵子
連絡先：〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8 (国際部)
Tel.03-3264-0661, Fax.03-3264-0663
E-mail: office-japan@ywca.or.jp
パレスチナでのパートナー団体：
パレスチナYWCA
東エルサレムYMCA

活動の沿革・概要： 日本YWCAは1991年より、パレスチナ訪問やパレスチナ問題の学習資料の配布などの活動を始めた。94年から98年まで、国際ボランティア

ア貯金の助成金を受け、パレスチナYWCAの合同プロジェクトを行った。日本YWCAは健康や栄養の分野の専門家を実地パレスチナに派遣し、エルサレムYWCAの職業訓練学校に健康教育コースを設置し、難民キャンプ内の女性の健康指導、キャンプ内のYWCAの保育所内での栄養指導などにあたった。さらに、2000年にはパレスチナYWCAを支えるための募金活動を開始した。また、日本YWCA国際部ではパレスチナYWCA支援プロジェクトを立

ち上げ、パレスチナの現状を伝えるため、ニュースレターの発行や報告会の開催などを行っている。2002年、パレスチナYWCAと東エルサレムYMCAの合同プロジェクトである「オリーブの木キャンペーン」が開始された。これはイスラエルの占領により根こそぎにされたオリーブの木を再び植えるという植樹キャンペーンである。日本YWCA国際部でもこの「オリーブの木キャンペーン」の広報と募金の呼びかけを行っている。

■日本パレスチナ医療協会 (JMPA)

連絡先：〒164-0001 東京都中野区東中野2-22-13 上の原住宅 E-1
Tel.03-5330-9679
E-mail: jpma@mx6.tlen.ne.jp
パレスチナでのパートナー団体：
パレスチナ赤三日月社
パレスチナ自治政府の保健省
国連難民救済機関

活動の沿革・概要： JMPAは、1986年、市民有志から成る。中東の平和を求めたグループを母体としている。このグループは、1982年、イスラエルによるレバノン侵攻に際する衝撃を受けて、500万円相当の復興援助額をベイルートの赤三日月社に送った。

JMPAは、設立以来、医療機器、医薬品、そして支援金をPRCSに送り続けて来た。

オスロ合意以降の実績は、100名以上のボランティア(医師、看護師、リハビリ療法士など)を、西岸、ガザ地区に送っている。

■ハジャルナ

連絡先：事務局（高田）

E-mail: hajarnaoffice@yahoo.co.jp

パレスチナでのパートナー団体：

エルサレム・メディア・アンド・コミュニケーション・センター

活動の沿革・概要：「ハジャルナ」は、イスラエルが占領地ヨルダン川西岸地区で施行している軍令を翻訳することなどを目的として2002年夏に発足したささやかな研究会です。40年ちかくにおよぶ占領支配の日常的な実態はニュース報道をみるだけではなかなか知ることができないのです

が、法令をひとつひとつ読み解き、意味内容を話し合っていくなかで、徐々に理解することができます。移動や商業活動の制限、水資源の収奪など、経済、社会、文化的な開発を阻害する諸条件が1300を超える軍令によって具体的に示されているからです。

原書はJMCC(エルサレム・メディア・アンド・コミュニケーション・センター)が95年に出版した軍令集の簡易編集版で、1967年から92年までの期間に西岸地区で発令された軍令を系統的に英語でよむことができ

ます(Israeli Military Orders in the occupied Palestinian West Bank: 1967-1992)。いずれ何らかの形にしたいのですが、当面は下記のウェブサイト翻訳を随時掲載しています。

<http://home.att.ne.jp/sun/RUR55/Hajarna/Hajarna.htm>

翻訳作業と並行してパレスチナ関連の映像作品も鑑賞し、自主上映会も企画しています。これまでに、「パレスチナ、パレスチナ」、「パレスチナ 響きあう声～EWサイドの提言から」などを上映しました。

■パレスチナ・オリーブ

代表者：皆川万葉

連絡先：仙台市青葉区土樋1丁目

4-28, Tel.&Fax. 022-222-3156

E-mail: p-olive@mue.biglobe.ne.jp

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~polive/>

パレスチナでのパートナー団体：

ガリラヤのシンディアナ

ナーブルスの石けん工場

活動の沿革・概要：1998年よりイスラエル内のパレスチナ人非営利農業団体「ガリラヤのシンディアナ」が生産するオリーブオイルとナーブルス（パレスチナ自治区）で生産されたオリーブ石けんをフェアトレードで日本に輸入・販売しています。そして、生産者やパレスチナの状況を通信、

ホームページ等でお知らせしています。

草の根でつながり、パレスチナの人々を応援することが、平等な社会、平和の実現をもたらすと考えています。

■パレスチナの子供の里親運動 (JCCP)

代表者：事務局長 猪股直子

連絡先：169-0073 新宿区百人町

2-21-22 小波荘 1-2-6

Tel&Fax. 03-3227-2706

E-mail: jccp@msc.biglobe.ne.jp

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~JCCP/>

パレスチナでのパートナー団体：

社会福祉・訓練協会(バイト・アトファル・アツソムード)ベイルート、レバノン

活動の沿革・概要：1982年イスラエルのレバノン侵攻下、ベイルートのサブラとシャティーラのパレスチナ難民キャンプで大虐殺が起こった。1984年9月、その

時の犠牲者の遺児21人の支援から里親運動は始まった。以来、激しいキャンプ戦争の時代を乗り越え、延べ1000人を超える里子たちを支援してきた。毎月一人当たり4500円の支援金を送るほか、緊急援助、バイトの活動センター建設への資金協力、里子訪問などを行った。内戦終了後、レバノンは復興の時代に入ったが、パレスチナ難民を取り巻く状況は改善されていない。今、レバノンのパレスチナ難民の多くが貧困ライン以下にあり、70種類以上もの職種から締め出される等、生活の

基盤も基本的な権利も奪われた彼らは、先の見えない閉塞状況にある。困難な状況を生きる里子たちとこれからも手を携え、共に歩んで行きたいと願っている。現在、里親は約270名。経済的援助だけでなく、里親と里子の人間的繋がりを重視、手紙等の交換による精神的支援も心がけている。機関誌「マルハバ」の発行やHP、里親の集い等による里親同士の交流や情報の共有、またパレスチナ関係NGOとの協力にも努めている。運動創始者である広河隆一氏が顧問。

■パレスチナの平和を考える会

代表者：役重善洋

連絡先：大阪市住吉区山之内 5-1-18

Tel.090-9273-4316, Fax.06-6694-9134

E-mail ysig@hotmai.com

http://www.palestine-forum.org/

活動の沿革・概要： 当会は、中東における公正な平和の実現と、半世紀以上にわたって奪われてきたパレスチナ人の権利と尊厳の回復を求める活動を行うことを目的として、パレスチナ問題に関心を持つ関西在住の市民・学生を中心に 1999 年に結成された N G O

(非政府組織) です。月に 1、2 回のミーティングを中心に、様々な人がそれぞれのペースや興味・関心にあわせて活動に関わっていますので、ご関心のある方はぜひ一度ご連絡下さい。

■活動内容・講演会や学習会などのイベントの企画

- ・パレスチナにおける人権侵害や人種差別政策に対する抗議
- ・通信「ミフターフ」の発行
- ・ホームページの運営
- ・メーリングリスト「パレスチナ・フォーラム」の運営

■賛助会員募集！ 当会では、私たちの活動に賛同し、支援して下さる賛助会員を募集しています。ご入会して頂いた方には通信『ミフターフ』の発送やイベント・集会などのご案内をいたします。ご協力よろしくお願い致します。

年会費：一口 2 0 0 0 円

入会方法：お名前、住所、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記の郵便振替口座にお振り込み下さい。

郵便振替口座 0 0 9 2 0 - 3 - 9 7 1 6 1
パレスチナの平和を考える会

■特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン

代表者：代表理事 北林岳彦

連絡先：〒 171-0031 東京都豊島

区目白 3 - 4 - 5 アビタ目白 304

Tel.03-3953-1393, Fax.03-3953-1394

E-mail: ccp@bd.mbn.or.jp

URL: http://www32.ocn.ne.jp/~ccp/

パレスチナでのパートナー団体：
Afaluna Society for Deaf Children (Gaza) / Palestinian Center for Human Rights / Jenin Early Childhood Center / PNGO / Palestinian Agricultural Relief Committee / UNRWA / Yesh Gvul / Gush Shalom / Ta ayush / AIDA / National Institution of Social Care and Vocational Training (Lebanon)

活動の沿革・概要：

— 1986 年に活動を開始。1999 年特定非営利活動法人認証。

— 子どもの保健、教育、人権に関する支援を地元の N G O とともに継続している。

- ・レバノン：子ども歯科、幼稚園、補習クラス、子どもセンター、女性の職業訓練
- ・ガザ：ろう学校
- ・ジェニン：母と子の心理ケアなど

— パレスチナ理解を広める活動：国内での講演会、写真・絵画展、ワークショップ、開発教育、貸出、講師派遣など

— パレスチナの平和をめざす活動：パレスチナの人権団体やイスラエルの平和団体との交流、共同行動

— 子どもたちの参加、発信を強める活動

— 東京弁護士会人権賞受賞

2004 年 9 月 23 日交流集会・お弁当を食べながらの交流と、各団体の活動紹介の時間をもちました。



西岸地区



- パレスチナ自治区 エリアA (完全に自治政府の下にある地域)
- パレスチナ自治区 エリアB (セキュリティはイスラエル政府とパレスチナ自治政府の共同管理の下にある地域)
- エリアC: イスラエル管理下の地域
- 既に建設されたイスラエル入植地
- 1996年から2001年2月の間に作られた前哨入植地
- 2001年2月以降に作られた前哨入植地

ガザ地区



報告書「パレスチナ人クリスチャンと平和」

- 発行者: 交流集会「パレスチナ人クリスチャンと平和」実行委員会
- 発行: 2005年8月4日
- 定価: 300円
- 問い合わせは実行委員会各団体まで。
※文責は各々の筆者にあります。
- 編集・翻訳校正・デザイン・小コラム・集会写真: 真野玄範
- 翻訳(通訳): 小林久美子、植田仁太郎、Kevin Seaver
- 写真: 大島俊一、
- テープ起こし: 神崎雄二、松浦順子
- 校正: 新名知子、宮脇博子、田中好子
- 印刷所: 有限会社 山猫印刷所

実行委員会

- ◇ 日本聖公会東京教区サラーム・パレスチナ/エルサレム教区協働委員会 (神崎雄二、宮脇博子)
- ◇ アハリー・アラブ病院を支える会 (新名知子、星山京子、渡邊幸之助)
- ◇ 特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン (田中好子、大河内秀人)
- ◇ 日本キリスト教協議会・国際関係委員会 (真野玄範)



発行：交流集会「パレスチナ人クリスチャンと平和」実行委員会

- 日本聖公会東京教区サラーム・パレスチナ / エルサレム教区協働委員会
- アハリー・アラブ病院を支える会
- 特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン
- 日本キリスト教協議会 (NCC)・国際関係委員会